

田原本町文化財 調査年報 19

2009年度



田原本町教育委員会

田原本町文化財 調査年報 19

2009年度



田原本町教育委員会

例　言

1. 本書は、田原本町教育委員会が2009年度（平成21年度）に実施した文化財事業の概要をまとめたものである。
2. 埋蔵文化財の発掘調査については、土地所有者・施工業者ならびに近隣の皆様にご協力とご理解を賜った。記して感謝します。
3. 本書の執筆は、I. 1を奥谷知日朗、I. 2を清水琢磨・奥谷の各調査担当者、II・IIIを河森一浩・西岡成晃・藤田三郎、IVを河森・清水・藤田が執筆し、西岡の協力を得て藤田が編集した。

目 次

I. 田原本町の埋蔵文化財

1. 町内における開発と遺跡の異動	
(1) 町内における開発と発掘調査	1
(2) 遺跡の異動	2
2. 埋蔵文化財の調査	
(1) 発掘調査の概要	4
1. 店古・鍵遺跡 第107次調査	6
2. 唐古・鍵遺跡 第108次調査	9
3. 宮古北遺跡 第15次調査	13
4. 保津・宮古遺跡 第37次調査	22
5. 十六面・薬王寺遺跡 第26次調査	26
6. 羽子田遺跡 第35次調査	29
7. 羽子田遺跡 第36次調査	35
8. 多遺跡 第22次調査	41
9. 多新堂遺跡 第3・4次調査	55
10. 前達道 第2次調査	65
11. 平出遺跡 第1次調査	69
12. 寺内町遺跡 第12次調査	73
(2) 試掘調査と工事立会の概要	76
1. 清水嵐遺跡試掘調査 (S-200901)	77
2. 法貴寺北遺跡試掘調査 (S-200902)	80
3. 多遺跡試掘調査 (S-200903)	84
4. 唐古・鍵遺跡試掘調査 (S-200904)	87

II. 資料の整理と活用・普及

1. 文化財資料の整理・保管	
(1) 埋蔵文化財の整理・保管	97
(2) 資料の撮影と写真・図面のデジタル化	100
(3) 図書の受領	100
2. 遺跡・文化財の保護	
(1) 史跡の追加指定	101
(2) 町指定文化財	102
3. 講座	103
4. 学校教育等への支援	
(1) 小学校出前授業・教材貸出	105

(2) 中学校職場体験学習	106
(3) 大学の学外授業	106
(4) 講師の派遣	107
5. 刊行物一覧	108
6. 資料の活用	
(1) 資料の貸出	109
(2) 写真掲載・撮影	110
(3) 資料調査	114
7. ボランティア組織	
(1) ボランティア組織の概要	115

III. 唐古・鍵考古学ミュージアム

1. 企画展・ミニ展示	
(1) 春季企画展「寺内町と陣屋の考古学—近世出原本の成立—」.....	119
(2) 秋季企画展「弥生グラフィティー～唐古・鍵遺跡の記号と器～」.....	122
(3) ミニ展示	
ア. 夏季ミニ展示	124
(4) 特別展示「田原本町内小学校の総合的な学習展示会」.....	125
2. 入館者・ホームページ	
(1) 入館者数	126
(2) 入館者アンケート	128
(3) 視察・研修・学校等からの来館	128
(4) ホームページ	129
3. ボランティアガイド	
(1) ボランティアガイドの実績	130

IV. 資料の報告

1. 田原本の近世棟端飾瓦と瓦屋・瓦師（河森一浩・清水琢哉・藤田三郎）.....	133
--	-----



I. 田原本町の埋蔵文化財

1. 町内における開発と遺跡の異動

(1) 町内における開発と発掘調査

本町における2009年度（平成21年度）の民間開発行為等による埋蔵文化財発掘届（第93条）は49件、地方公共団体等による通知（第94条）は18件で、計67件を数える。ここ数年、発掘届件数が微増傾向にある。

今年度の発掘調査は13件である。このうち田原本町教育委員会が実施した発掘調査は13件で、その内訳は個人住宅の建築4件、公共事業4件、民間開発5件（倉庫を含む）である。

第1表 田原本町における2009年度の発掘届・通知件数一覧

発掘届 93条	発掘通知 94条		発掘調査	工事立会	慎重工事	先行工事
49	18	通知内容	13	24	29	1
		実施分	町13(試掘4) 県1	18	-	-

第2表 田原本町の発掘届・通知と発掘調査件数の推移

	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09
発掘届(93条)	25	44	45	43	43	53	57	49
要通知(94条)	11	13	18	8	17	18	11	18
計	36	57	63	51	60	71	68	67
発掘件数	町	19	18	18	14	12	18	11
	県	1	1	0	4	4	2	1
町内能調査件数	19	19	18	16	16	20	12	14

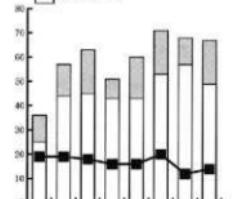
第3表 町教育委員会が実施した発掘調査の原因別推移

	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09
範囲確認	2	3	3	1	0	0	0	0
個人住宅	11	7	8	5	4	5	6	4
公共事業	5	5	4	5	6	6	3	4
民間開発	分譲	0	1	0	1	2	4	2
その他	1	2	3	2	0	3	0	3
計	19	18	18	14	12	18	11	13

第4表 町教育委員会による調査の面積および出土遺物数の推移

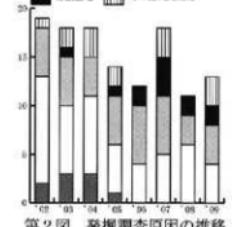
	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09
総調査面積(m ²)	2,988	1,262	1,233	1,030	986	1,400	341	1,117
出土遺物数(個)	783	532	314	104	95	146	103	118

発掘届(64件) ■ 内能調査件数
発掘届(33件)



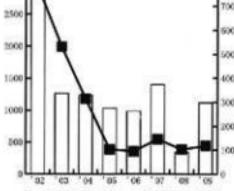
第1図 発掘届・通知と調査件数の推移

■ 個人住宅 ■ 公共事業 ■ 諸々の他開発地
■ 要確認 ■ 分譲住宅



第2図 発掘調査原因の推移

■ 調査面積(m²) ■ 出土地點数(箇)



第5表 他機関による町内遺跡調査一覧

遺跡名	調査次数	調査地	原因	調査面積	調査期間
A 宮古北遺跡	第16次	田原本町黒山	黒田池堤防改修	300m ²	奈良県橿原考古学研究所

※アルファベットは第5図中に対応

(2) 遺跡の異動

本年度は16件の遺跡の異動をおこなった。12件は新規発見の古墳であり、4件は遺跡名の追加や遺跡内容の訂正・追加である。

小阪細長3・4号墳 半成18年度の橿原考古学研究所の調査において、現小阪集落の東側で2基の古墳が検出され（1・2号墳）、周辺に古墳が点在していると考えられた。このことから小阪榎木遺跡第1次調査で検出したし字溝も方墳の可能性が高まった。これを3号墳とし、小阪安出前遺跡の工事立会（R-200710）で検出した周濠を4号墳として新規確認の報告をおこなった。

羽子田23～28号墳 羽子田遺跡第32次調査で23・24号墳、33次で25～27号墳、31次で28号墳を検出した。墳形は方墳が多く、前期末の可能性が28号墳、中期が25号墳、他は後期の古墳である。

保津岩田古墳 過去の調査（保津・宵古道跡第14次調査）で検出されていた溝が方墳の可能性が高かったが、奈良県遺跡地図には記載されていなかったので、この度、新規登録をおこなった。

薬王寺井坪1・2号墳 十六面・薬王寺遺跡第24次調査で検出された中期の方墳2基である。なお、両古墳の間では木棺を検出している。

矢部藤ノ森古墳 矢部團栗山古墳の西側約70mで実施した試掘調査において、古墳時代の溝を検出した。これを古墳周濠と推定し、小字名から矢部藤ノ森古墳とした。

第6表 2009年度の遺跡異動一覧

遺跡名	異動内容	遺跡概要	備考	通知	通知日
1 小阪細長3号墳	新規確認	古墳	方墳	教文 第7020号	H21. 10. 27
2 小阪細長4号墳			方墳？	教文 第7021号	
3 羽子田23号墳			円墳？	教文 第7022号	
4 羽子田24号墳			方墳？	教文 第7023号	
5 羽子田25号墳			方墳？	教文 第7097号	
6 羽子田26号墳			方墳（一辺10m）	教文 第7098号	
7 羽子田27号墳			方墳？	教文 第7099号	
8 羽子田28号墳			方墳？	教文 第7100号	
9 保津岩田古墳			方墳	教文 第7101号	
10 薬王寺井坪1号墳			方墳	教文 第7102号	
11 薬王寺井坪2号墳			方墳	教文 第7103号	
12 矢部藤ノ森古墳			方墳？	教文 第7104号	
13 保津・阪手道	訂正・追加	古道	遺跡名等追加	教文 第7019号	H21. 9. 15
14 タカツキ古墳		古墳		教文 第7018号	
15 宮森遺跡		遺物散布地		教文 第7017号	
16 阪手ホウズミ遺跡		遺物散布地		教文 第7016号	



2. 埋蔵文化財の調査

(1) 発掘調査の概要

2009年度は13件の本調査をおこなった。弥生時代から古墳時代では、唐古・鍵遺跡、多遺跡、羽子田遺跡、宮古北遺跡において集落遺構を検出した。多遺跡では弥生集落の東側の環濠と思われる溝群や土坑群を多数検出した。遺物では宮古北遺跡出土の朱精製土器が注目される。また、羽子田遺跡第36次調査では、重要文化財「埴輪牛」が出土した羽子田1号墳の前方部周濠を検出し、墳形と主軸が推定できるようになった。

古代以降では、多新堂遺跡の調査成果が特筆される。筋違道（太子道）関連の可能性がある遺構を検出したことで、道の位置や規模を確認することができた。また、遺物では、多遺跡第22次調査で小形銅鏡が完形で出土している。



第5図 田原本町の遺跡と調査地点 (S = 1/40,000)

第7表 2009年度 発掘調査一覧表

遺跡名	次数	調査地	原因者	原因	期間	面積	担当	備考	
								出土遺物	遺物量(箱)
1 唐古・鍾	第107次	田原本町大字唐古小字高塚94番、個人	個人住宅の建築	2009.10.2 ~10.30	6m ²	奥谷	国庫補助		
2 唐古・鍾	第108次	田原本町大字唐古小字高塚82番1号側道路	田原本町長	下水道工事	2009.10.29 ~10.30	4m ²	奥谷	下水道課	
3 宮古北	第15次	山原本町人字宮古小字抽木 37番1号	KDDI物	携帯電話基地局 の建設	2009.5.18 ~ 6.2	68m ²	奥谷・清水	受託	
4 保津・宮古	第37次	古墳時代前半 : 土坑1基、小溝8条、柱穴群 古墳時代後半 : 土坑2基、大溝1条、渠1条、柱穴群 古代 : 小溝1条、河跡3条 近世 : 無			2010.2.8 ~ 2.12	37m ²	奥谷	町内	
5 十六面・乘王寺	第26次	山原本町人字乘王寺北垣内 13番2号	個人	農業用倉庫の建 築	2009.5.27 ~ 6.1	2m ²	清水	国庫補助	
6 羽子田	第35次	山原本町人字新町小字池ノ内 79番、81番2、206番2	御東庄	宅地分譲	2009.7.6 ~ 8.6	358m ²	清水・奥谷 小林	受託	
7 羽子田	第36次	古墳時代 : 渠2条、河跡1条 中世 : 大溝1条、渠3条、方墳2基 近世 : 無					弥生土器、上部器、須恵器、埴 輪等	3箱	
8 多	第22次	田原本町大字多字小字坂尻 452番1号、西瓢風	田原本町長	農業用整地作業 (川排水路工事)	2010.11.3 ~ 3.20	210m ²	清水・大谷	建設課	
9 多新堂	第3次	古墳時代 : 土坑8基、渠15条、ピット多数 古墳時代 : 土坑1基、大溝1条、渠1条 中世前半 : 素掘小溝群 中世後期 : 大溝1条 近世 : 片戸1基、人溝1条					弥生土器、土器、須恵器、瓦器、 輸入磁器、近世陶磁器、石器、木製品、銅鏡等	92箱	
10 多新堂	第4次	山原本町人字多字小字東タキ 74番1号 南側道路	田原本町長	農業用整地作業 (川排水路工事)	2009.11.4 ~ 12.1	191m ²	奥谷・人谷	建設課	
11 駄道	第2次	古墳時代以前 : 落ち込み 古代 : 上坑1基、渠1条、柱穴2基、落ち込み1 中世 : 上坑1基、渠1条 近世以降 : 野戸口3基、素掘小溝群					土器、須恵器、瓦器、近世陶 磁器等	2箱	
12 平山	第1次	山原本町人字平田小字原ノ内 73番3	KDDI物	携帯電話基地局 の建設	2009.9.9 ~ 9.19	20m ²	清水・奥谷	受託	
13 寺内町	第12次	田原本町人字輪町472番2号 中笠木	個人	個人住宅の建築	2009.11.10	2m ²	清水	国庫補助	
							土器、瓦質土器等	1箱	

1. 唐古・鍵遺跡 第107次調査

1. 遺跡・既調査の概要

唐古・鍵遺跡は、標高約48m前後の沖積地に立地する、弥生時代を代表する大環濠集落遺跡である。本調査地は遺跡の北西端部にあたる。周辺では第12・35・105次調査を実施しており、集落北側を区画する環濠や「北方砂層」と呼ばれる河跡を検出している。

2. 調査の成果

今回の調査は個人住宅の建築に伴う事前調査である。調査区は建物予定地外に設定した。

(1) 層序

第Ⅰ層：暗灰色土（瓦多し）、第Ⅱ層：暗青灰色粘質土、第Ⅲ層：灰褐色粘質土（シルト質）、第Ⅳ層：暗褐色砂質土、第Ⅴ層：灰色砂。

第Ⅰ・Ⅱ層は近現代、第Ⅲ層は近世の造成土と考えられる。第Ⅳ層上面で中近世の素掘小溝を検出した。第Ⅳ層は弥生時代の遺物包含層もしくは河跡の最上層堆積の可能性が考えられる。第Ⅴ層以下は河跡堆積層と考えられるが、調査では遺物が出土していない。

(2) 造構と遺物

中近世素掘小溝 南北方向の小溝を検出した。溝幅0.3m前後、深さは約0.1mを測る。土層は、黄灰色粘質土が2条、灰色粘質土が1条であり、切り合いから前者の方が新しい。

3. まとめ

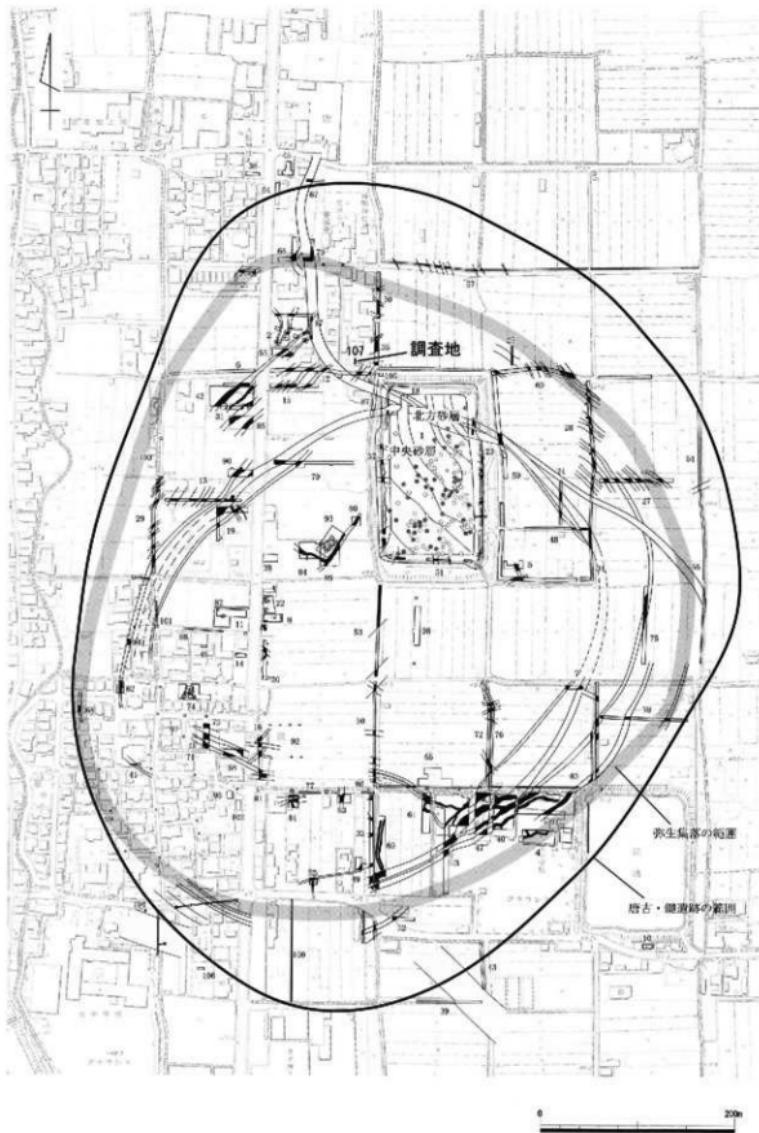
今回の調査では弥生時代の顯著な造構は検出されなかった。近世造成土や素掘小溝に含まれていた弥生土器も小片であり、後期のものが中心である。判断材料を欠くものの、第Ⅴ層（もしくは第Ⅳ層）以下の時期不明河跡は、いわゆる「中央砂層」もしくは「北方砂層」の周縁部にあたる可能性が考えられる。



1. 調査区全景（南から）



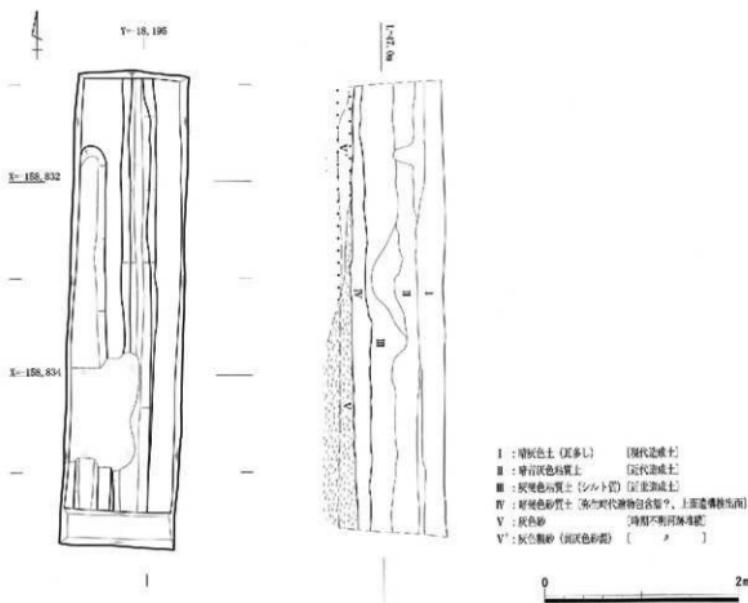
2. 東壁土層堆積状況（北西から）



第6図 唐古・健遺跡全体図及び第107次調査地位置図 (S = 1/5,000)



1. 調査区位置図 (S = 1/500)



2. 這様平面及び東壁土層堆積図 (S = 1/50)

第7図 唐古・雞遺跡第107次発掘調査

2. 唐古・鍵遺跡 第108次調査

1. 遺跡・既調査の概要

今回の調査は唐古・鍵遺跡の北西部にある。本調査地の西側で実施した第66・70次調査では、弥生時代前期や中期後半の河跡（北方砂層）等を検出しており、今回の調査でも河跡が検出されることが予想された。また、調査地の北側は中世豪族居館の唐古氏居館推定地にある。北側隣接地には神明神社・常徳寺・養福寺が鎮座する。

2. 調査の成果

今回は東西道路内において実施された下水道工事に伴う調査である。立坑設置部分2ヶ所について調査を実施した。東側のトレンチを第1トレンチ、西側を第2トレンチとする。

(1) 層序

第1トレンチは現代の擾乱を著しく受けている。よって、ここでは第2トレンチの層序を示す。

第I層：アスファルト、第II層：クラッシャー、第III-1層：暗青灰色土（クラッシャー混）、第III-2層：暗緑灰色土、第III-3層：暗青灰色土（砾・砂混）、第III-4層：淡青灰色土（砂混）、第IV層：淡茶灰色砂質土、第V層：褐色砂質土（シルト混）、第VI層：灰色シルト、第VII層：黒灰色粘土。

第I～III層は現代道路の造成土層である。第IV・V層は近世の道路造成に伴い形成された層とみられ、第IV層上面が近世の遺構検出面となる。第VI層は地山もしくは弥生時代前期以前の河跡堆積層と考えられる。その上面で弥生時代前期の土坑を検出した。第VII層以下は確実な地山層であり、青灰色粘土、灰色粘土、灰色シルト、黒色粘土と続く。

(2) 遺構と遺物

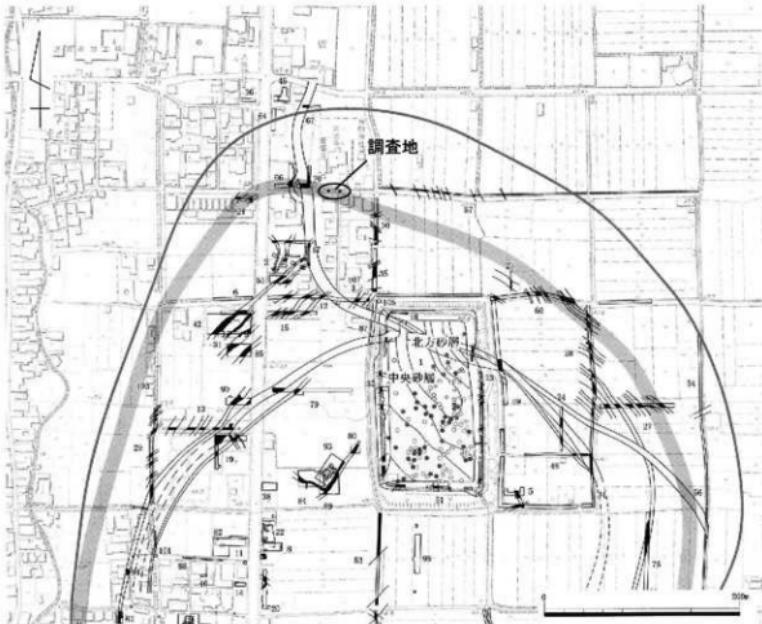
第1トレンチ（トレンチ径約1.4m）

本トレンチは、工事前に現代排水樹が設置されていた箇所にある。排水樹の設置及び撤去と現代水道による擾乱はトレンチ全域に及んでおり、暗灰色シルト層まで及ぶ。暗灰色シルト層の下層には灰色粗砂層が拡がる。これらの層は地山層もしくは弥生時代以前の河跡堆積の可能性を考えられる。

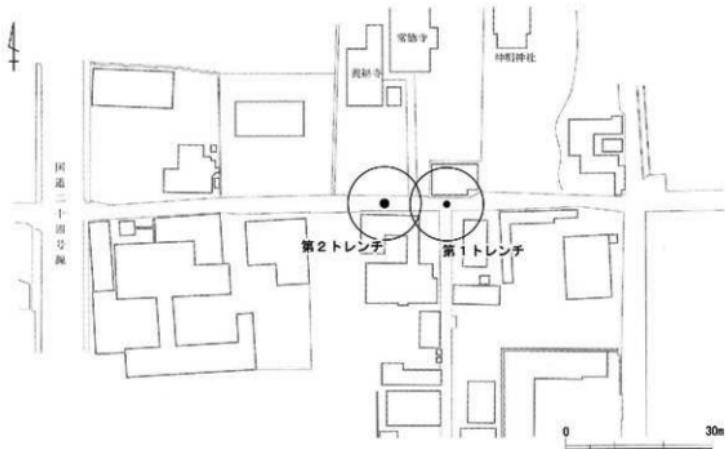
S D-1001 部分的に確認した溝堆積で、大きく擾乱を受けている。溝底面の標高は約46.1mである。走行方向等の遺構の詳細は確認できなかったが、第2トレンチで検出したS D-2002と対応するならば、東西方向の溝の可能性が考えられる。ただし、本遺構の上層は暗褐色粘質土（シルトブロック）でS D-2002とは土質が異なり、一連の遺構かどうかは慎重な検討を要する。近世～近代の遺構とみられる。

第2トレンチ（トレンチ径約1.9m）

第1トレンチより西側約16mに位置する。本トレンチの北側には養福寺と常徳寺がある。トレンチ中央は現代水道による擾乱を受けている。

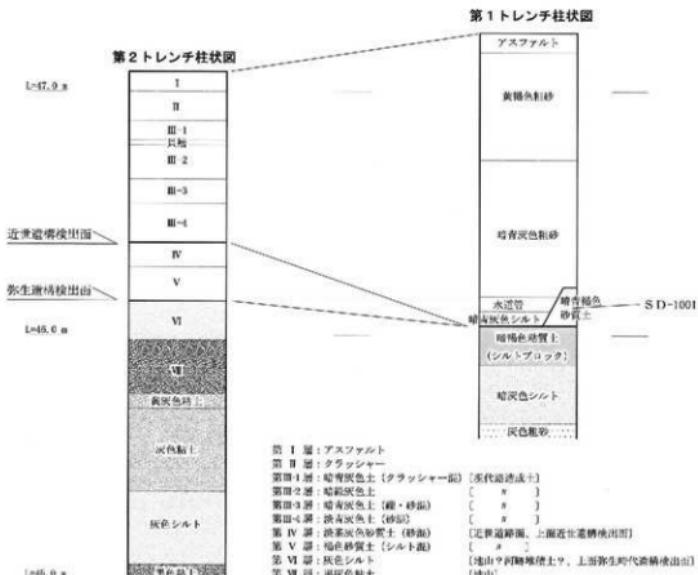
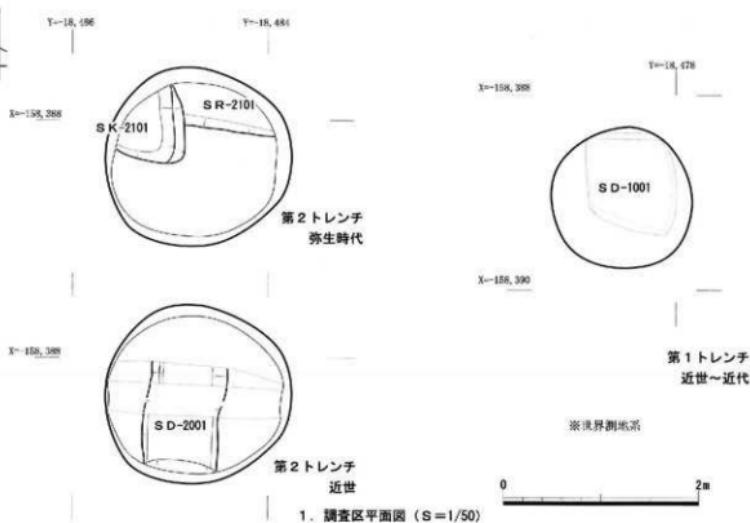


1. 調査地位図 ($S = 1/5,000$)



2. 調査区位置図 ($S = 1/1,000$)

第8図 第108次調査地及び調査区位置図



第9図 調査区平面及び柱状図

弥生時代の遺構

S K-2101 トレンチ北西で検出した土坑である。土坑の大半はトレンチ外で、土坑の南東側がトレンチ内にあたる。平面形は方形を呈するとみられる。深さは約0.4mを測り、堆積土は上・中層が淡灰褐色シルト、下層が灰色シルトである。上層からは大和第I-1-b様式の壺を中心とする大形土器片が出土しており、その遺物量は2箱になる。出土状況から、土坑が埋没した後の凹みに土器の廃棄がされたと想定される。

S R-2101 トレンチ北半で検出した、東西もしくは西南西-北西北の河跡と考えられる堆積である。深さは約0.3mを測り、青灰色シルトを堆積土とする。また、第VI層は本河跡の堆積層の一部である可能性も考えられる。遺物が出土しなかったため時期を確定できないが、前述のS K-2101に切られていることからそれよりも古い堆積である。

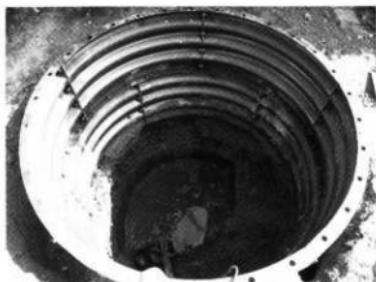
近世の遺構

S D-2001 トレンチ南半で検出した南北方向の溝である。溝幅は0.8m、深さは0.4mを測る。第IV層上面を遺構検出面とし、青灰色砂質土及び淡青灰色粘質土を埋土とする。染付茶碗片が含まれていたことから、時期は近世後半以降と考えられる。本トレンチは養福寺と常德寺の境界上に位置することから、本遺構はその境界に関連するものと考えられる。

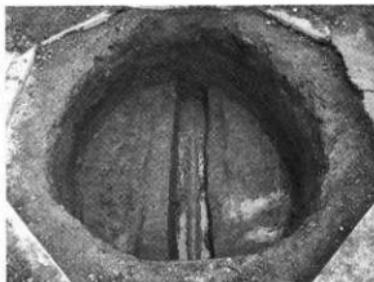
S D-2002 トレンチ北半で検出した、東西方向の溝である。南肩を検出したのみであるため溝幅は不明、深さは0.8mを測る。第III-2層上面を遺構検出面として、青褐色土を埋土とする。S D-2001を切る。第1トレンチのS D-1001と一連の遺構である可能性も考えられる。

3.まとめ

第1トレンチは現代搅乱が激しく地下遺構の状況は不明であったが、第2トレンチでは弥生時代と近世の遺構を検出することができた。第2トレンチで弥生時代前期前半の土坑を検出したことから、本地周辺は前期の居住域である可能性が考えられるようになった。前期の唐古・鍵遺跡は北地区（唐古池周辺）と西地区（鍵集落北半周辺）に木器貯蔵穴等の遺構分布が認められているが、本地西側で実施した第66次調査では河跡最下層より大和第I-1-a様式の弥生土器と凸帯文深鉢が出土していることからも、前期ではより広い範囲に散在して居住していた可能性がある。



1. 第1トレンチ全景（西から）



2. 第2トレンチ全景（東から）

3. 宮古北遺跡 第15次調査

1. 遺跡・既調査の概要

宮古北遺跡は標高45m前後の沖積地に立地する、古墳時代前期と古代を中心とする集落遺跡である。本調査地北東側でおこなった第1次（保津・宮古遺跡第3次）調査や第5次（同8次）調査では、弥生時代中後期の河跡や古墳時代前期の環濠等を検出している。環濠は二重で集落の東辺を区画しており、集落は一辺100mの正方形を呈していたと想定される。環濠は布留O式前後の機能し、短期間に集落は解体されたと考えられる。

第1次調査の東側にあたる第2次（同4次）調査では古代の建物群を検出した。また遺跡南端の第12次（同29次）調査では古墳の可能性がある溝を検出し、初期須恵器が出土している。

2. 調査の成果

今回の調査は携帯電話無線基地局の建築に伴う事前調査である。鉄塔建設予定地において南北85m×東西8mの調査区を設定した。調査の進行上、古墳時代前期の遺構については北半部分の一部を掘り残し、工事立会で対応した。

（1）層序

第I層：暗褐色土、第II層：灰青色粘質土、第III層：茶灰色土、第IV層：暗灰色粘質土、第V層：暗褐色土、第VI層：黒褐色土、第VII層：黄灰色シルト、第VIII層：黄褐色粘質土、第IX層：青灰色シルト、第X層：青灰色微砂。

第III層までは水田層で、現代の堆積層である。第IV層～V層は古墳時代に形成された遺物包含層とみられ、第IV層上面は古代～近世の遺構検出面である。第V層上面は古墳時代後期の遺構検出面、第VI層上面は古墳時代前期の遺構検出面である。第V層には須恵器が含まれない。第VI層は縄文時代の遺物包含層の可能性も考えられる。第VII層以下は確定的な地山層である。

（2）遺構と遺物

古墳時代前期の遺構

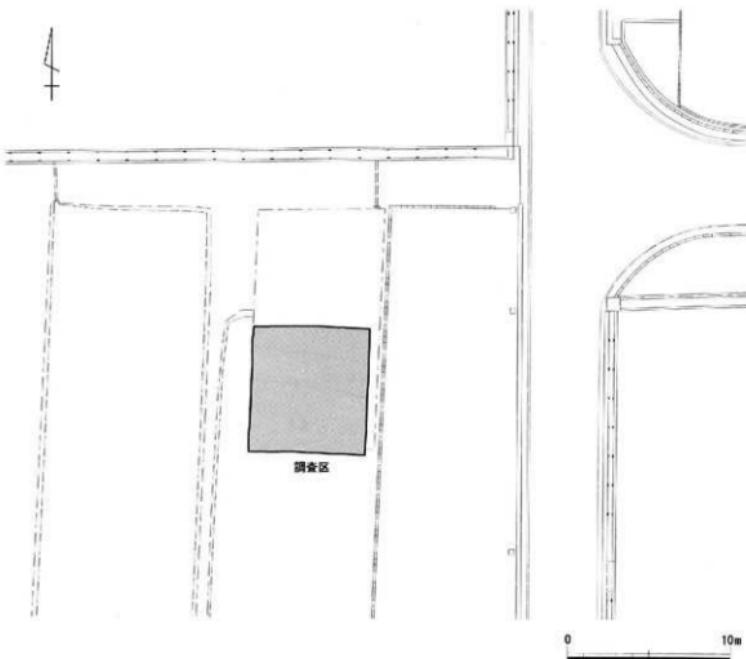
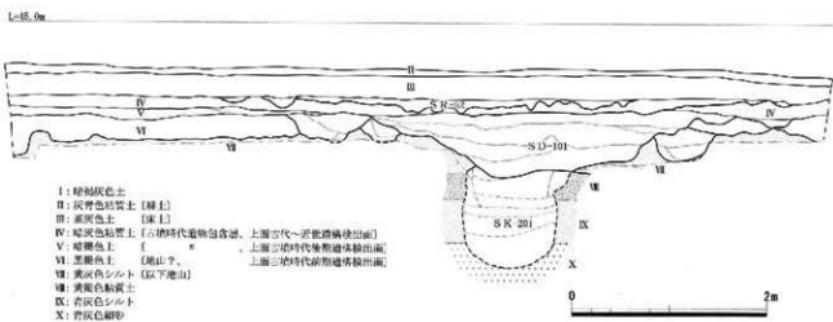
第VI層上面を遺構検出面とする。

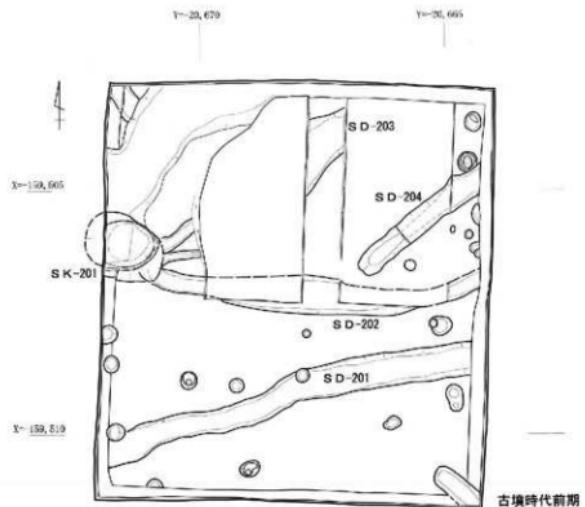
S K-201 ドレンチ西端で検出した上坑で、上坑の西半は調査区外となる。後述のSD-101に大きく削平を受ける。また、本土坑の東肩に接してSD-202など3条の小溝を検出している。本土坑と小溝群の切り合いは確認できず、実際に本土坑と小溝は接続していた可能性も考えられる。平面は不整円形で、長径が約1.7m、短径が1.4mを測る。土坑の形態は袋状にちかい円筒形を呈し、深さは1.4mを測る。堆積土は大きく3層に分層され、上層は暗褐色粘質土や灰黑色粘質土等、中層は黒灰色粘土や暗灰色粘土、灰色粘土や黒色粘土の植物層である。本土坑の機能は、その形態から井戸と考えられる。時期は布留O式とみられる。

出土遺物は少ないが、中層からまとまって上器と木製品が出土した（第13図）。第13図1は広口壺の口縁部、2は布留形壺。3は丸底の鉢で、口縁部に片口がつく。外面はナデ調整、内面は丁寧なハラミガキが施されている。外面には煤が付着している。また、内面には朱が付着しており、そ



第10図 調査地位置図(S = 1/2500)

1. 調査区位置図 ($S = 1/300$)2. 調査区西壁断面図 ($S = 1/300$)
第11図 調査区平面及び西壁上層堆積図



古墳時代前期



古墳時代後期

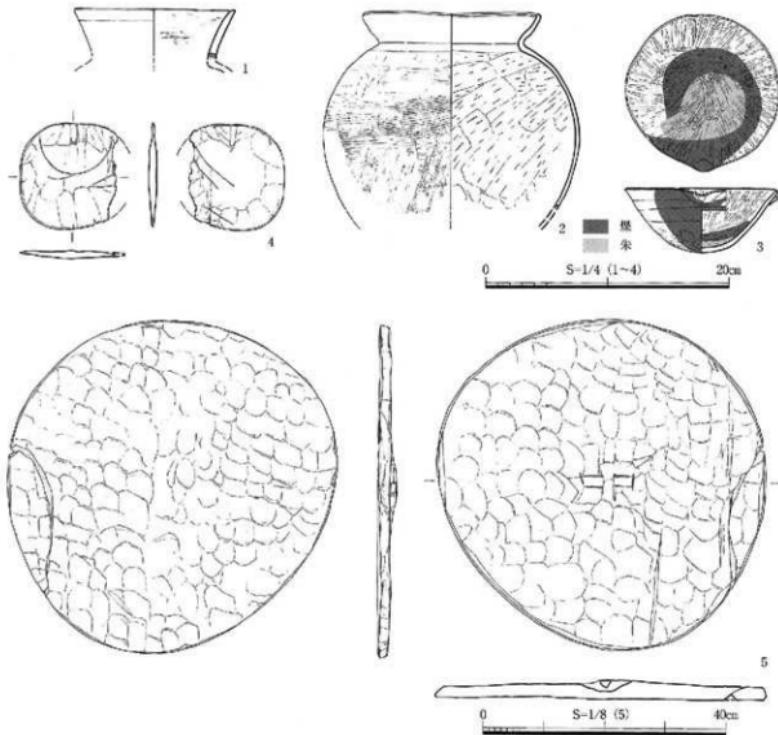
第12図 古墳時代前期・後期の遺構平面図 (S = 1/100)

の付着は片口側に偏っている。朱と煤の付着から、この鉢は粉末状の朱を煮沸し、朱の精製に使用されたものと考えられる。

4は小形の円板状木製品で、径は8.5cmを測る。片面には弧状、他面には直線上の線刻が施されている。5は大形の円板状木製品で、長軸54.5cmを測る。片面中央部には鉤がつく。この鉢は、削り出しによってわずかな隆起部を作り出し、その両側から抉りによって貫通させ孔としている。

S D-201 トレンチ南半で検出した小溝である。東北東-西南西方向に軸をもつが、やや蛇行する。溝幅0.5~0.7m、深さは5cm前後である。暗灰色粘土を堆積土とする。土師器小片が出土したのみで、詳細な時期は不明。

S D-202 トレンチ中央で検出した、東西方向に軸をもつ小溝である。やや弧をえがくように走行し、トレンチ西端でSK-201に接する。溝幅0.4~0.8m、深さは0.1mを測り、灰黒色粘質土を堆積土とする。出土遺物は土師器小片数点のみだが、布留形瓦片が含まれている。



第13図 SK-201出土遺物実測図

S D-203 トレンチ北端で検出した、北東－南西方向の溝である。検出幅が小さいため不明な点が多い。溝幅約1m、深さは約0.1m。堆積土は灰黒色粘質土である。土師器小片が数点出土したのみであり、時期は不明。

S D-204 トレンチ北東で検出した小溝である。北東－南西方向に軸をもつ。溝幅約0.5m、深さは約0.1m。黒褐色粘質土を堆積土とする。布留形甕片を含む土師器小片が出土している。

柱穴群 計20基の柱穴を確認した。径0.4m前後、深さは0.1～0.2mである。堆積土は暗灰色粘土である。

古墳時代後期の遺構

第V層上面を遺構検出面とする。

S K-101 トレンチ北東端で検出した、土坑と考えられる遺構である。平面形は不明。深さは約0.1mを測る。堆積土は暗灰褐色粘質土である。時期は不明。

S K-102 トレンチ北東端、SK-201の西側で検出した、土坑と考えられる遺構である。平面形は不明。深さは0.1mを測る。堆積土は上層が暗灰褐色粘質土、下層が暗灰色粘質土である。土師器小片が出土したのみであり、時期は不明。

S D-101 トレンチ北西側で検出した人溝である。南西－北東方向に軸をもつが、トレンチ北端ではやや東に屈曲するようである。溝幅は約3m、深さは0.5～0.7mで、南西側がやや深くなる。古墳時代中期（TK47）～後期の須恵器片が出土している。

S D-102 トレンチ西半で検出した浅い溝である。南北方向に軸をもつ。溝幅は約1m、深さは約0.2mを測る。褐灰色粘質土を堆積土とする。遺構の時期を決定できる遺物は出土していないが、SD-101を切っていることから、それより新しい遺構である。

S X-101 トレンチ東半で検出した、浅い落ち込み状の遺構である。深さは約5cmである。

柱穴群 計17基の柱穴を確認した。径0.2m前後、深さは0.1mである。堆積土は暗灰色粘質土や灰色粘土である。

古代の遺構

第IV層上面を遺構検出面とする。

S D-51 トレンチ西半で検出した小溝である。南北方向に軸をもつ。溝幅約0.3m、深さ約0.2m。灰色粘質土を堆積土とする。

S R-51 トレンチ中央から西半にかけて検出した河跡堆積である。幅約3m、深さ約0.2m。灰色粗砂（黄褐色粗砂混）を堆積土とし、北側がやや深くなる。TK209頃の須恵器が出土している。

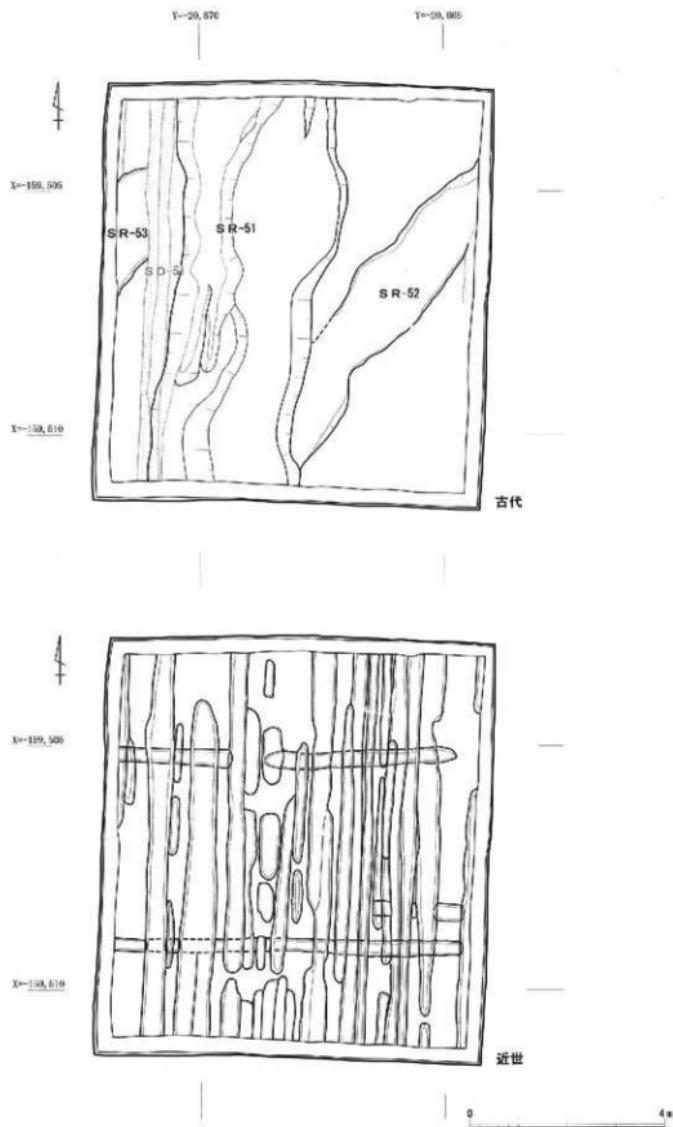
S R-52 トレンチ東半で検出した河跡堆積である。南西－北東方向に軸をもつ。幅約1.4m、深さ約0.1mを測る。灰色粗砂を堆積土とする。時期は不明。本遺構と後述のSR-53は、その規模より洪水時の河床流の砂層堆積である可能性がある。

S R-53 トレンチ西半で検出した河跡堆積である。南西－北東方向に軸をもつ。幅約1.7m、深さは約0.1mを測る。灰色粗砂を堆積土とする。時期は不明。

近世の遺構

古代の遺構検出面と同じく、第IV層上面を遺構検出面とする。

素掘小溝群 調査区全域で、南北方向を主とする小溝群を検出した。溝幅0.3m前後、深さは5



第14図 古代・近世の造構平面図 (S = 1/100)

cm前後である。茶灰色土を堆積土とする。耕作にともなう素掘小溝であろう。

3. まとめ

今回の調査では、古墳時代前期・後期、古代、近世の各時期の遺構を確認した。古墳時代の遺物包含層は良好に残存しているが、古代と近世の遺構が同一の遺構検出面であったことから、古代以降は著しく削平をうけたものと考えられる。

繩文・弥生時代に所属する遺構は、今回の調査では検出されなかった。しかし、調査では縄文時代後期の土器片が微量ながら出土しており、周辺の調査においても指摘されているとおり第VI層：黒褐色土が当時期の遺物包含層になる可能性もある。

第V層上面で検出した古墳時代前期の柱穴や小溝、土坑（井戸？）は、集落遺構であると考えられる。土坑からは大形の円板状木製品や朱精製鉢など特殊遺物が出土したが、当時の出土遺物量は全体的に少なく、集落でも縁辺部の様相を呈しているとみられる。第1・5次調査で検出した二重環濠から、当時期の集落形態は一辺約100mの方形プランが想定されているが、本地はその環濠復元ラインより外側にある。この環濠集落より外側にあたる第2次調査においても、布留期の土坑が検出されており、集落形態及び周辺の状況は今後の課題である。

古墳時代後期の遺構としては、大溝をはじめとする遺構を確認した。大溝は出土遺物やその走行方向等から古墳の周濠とは考えにくく、その性格は不明である。また、古代の浅い河跡堆積も確認しているが、その規模から一時的な流れであったことが想定される。集落解体後の様相についても、今後の調査成果の蓄積を期待したい。



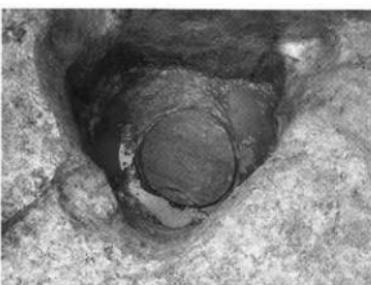
1. 朱精製土器



2. 大形円板状木製品



1. 古墳時代前期遺構調査状況（南から）



2. SK-201木製品出土状況（東から）



3. SD-101完掘状況（南西から）



4. 古代遺構完掘状況（南から）



5. 近世遺構完掘状況（南から）

4. 保津・宮古遺跡 第37次調査

1. 遺跡・既調査の概要

保津・宮古遺跡は、弥生時代～古墳時代・古代・中世の複合遺跡である。遺跡範囲内には、中近世の保津環濠遺跡や中世寺院跡の常楽寺推定地がある。また、古代の道路跡である筋道と保津・阪手道が遺跡内に縦横断する。

今回の調査地は保津環濠遺跡の東側隣接地にあたる。保津環濠遺跡の東側ではこれまでに第27・31次調査を実施し、弥生時代と中世前半を中心とした遺構を検出している。これらの成果から、今回の調査でも複数時期の遺構が高い密度で検出されることが予想された。

2. 調査の成果

今回の調査は農業用倉庫の建築に伴う調査である。建物基礎部分にあわせて逆コの字形に調査区を設定した。調査では工事掘削深度（GL-90cm）までにとどめた。

(1) 層序

第Ⅰ層：黒色土及び茶灰色土、第Ⅱ層：暗茶灰色土、第Ⅲ層：暗灰褐色土、第Ⅳ層：淡灰褐色土、第Ⅴ層：褐灰色砂質土、第Ⅵ層：黒褐色土（部分的にハード）。

第Ⅰ・Ⅱ層は近現代の造成土で、第Ⅲ層上面は近世末以降の遺構検出面となる。第Ⅲ～V層は近世頃に形成された造成土である。第Ⅵ層は固く締まった中世遺物包含層で、上面が中世～近世の遺構検出面である。第Ⅵ層直下には暗青灰色砂質土を確認しており、これが地山層になると考えられる。

(2) 遺構と遺物

中世の遺構

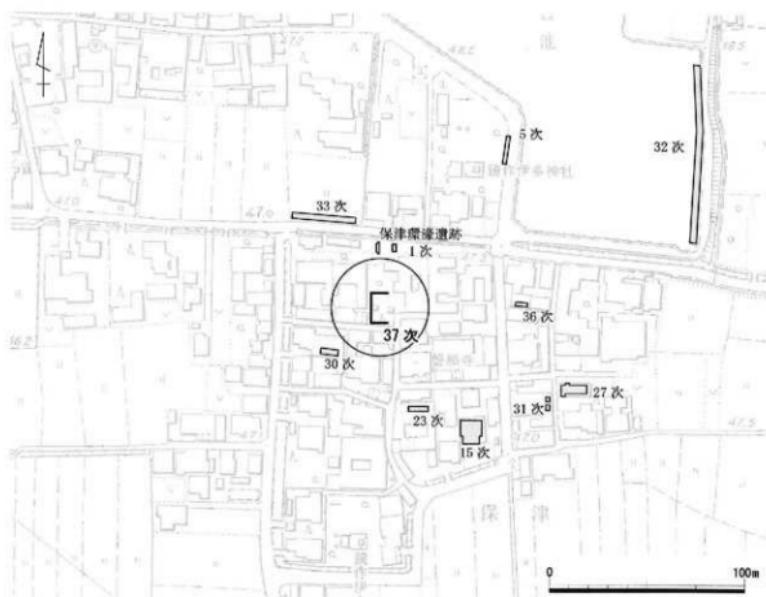
S D-51 北側のトレンチで検出した南北方向の溝である。南側のトレンチでは対応する遺構を確認していないため、南北トレンチ間で東もしくは西に屈曲している可能性が考えられる。溝幅は約2m、掘削していないため深さは不明。堆積土は灰色土である。

S X-51 南北両トレンチの東半で検出した落ち込み状の遺構で、その西肩を検出した。深さは約0.6mで、堆積土は暗褐灰色砂質土である。遺物量は比較的多く、土師器小皿をはじめ瓦器、瓦質土器を包含しており、室町期に堆積したと考えられる。

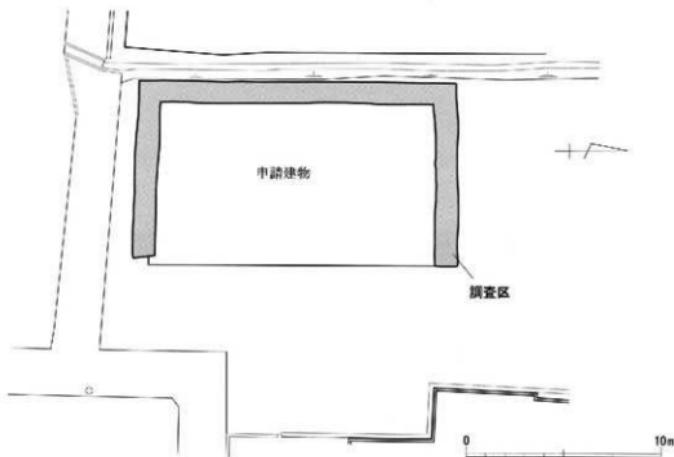
近世後期の遺構

S D-11-12 南トレンチの東端で検出した南北方向の溝2条である。深さは0.2～0.3mを測り、堆積土は暗褐色砂質土である。底面にやや深く凹む箇所があることから、小溝の集合である可能性が考えられる。近世磁器片等が出土した。

S D-13 南トレンチの西側で検出した南北方向の溝である。S D-10に切られる。溝幅0.4m、深さ0.2mを測り、上層が淡褐色土、下層が灰色粘質土である。近世磁器片や土師質小皿、焼成片等を含む。



1. 調査地位置図 ($S=1/2,500$)



2. 調査区位置図 ($S=1/250$)

第15図 保津・宮古遺跡 第37次調査調査地及び調査区位置図

S D-14 北トレチの中央で検出した南北方向の溝である。S D-51を切る。溝幅約0.6m、深さは0.4mを測る。上層は灰色粘質土、下層は青灰色粘質土である。

近世末以降の遺構

S K-01 調査区南西端で検出した井戸である。後述のS D-10、S D-01を切る。調査区外に拡がるため遺構規模は不明。3段以上重ねた土師質井戸枠をもつ。井戸枠は径約65cm、高さ約41cmを測る。

S D-10 調査区西側で検出した南北方向の溝である。近現代の遺構であるS D-01により大きく削平をうけており、本溝の東肩が残存する。よって溝幅は不明、深さは0.6m以上を測る。位置関係や溝方向から、S D-01の前身の溝である可能性が考えられる。

S D-01A・B 調査区西側で検出したS D-10にはば重複して掘削された溝である。層序から再掘削されていると考えられる。調査区外に拡がるため溝幅は不明。深さは約1mを測り、上層が淡茶灰色土等、下層は暗褐灰色土等である。溝底面には走行方向に沿って木樋を据えられていた。中層には瓦や土器等が出土し、本溝を埋め戻す際に廃棄したとみられる。

3. まとめ

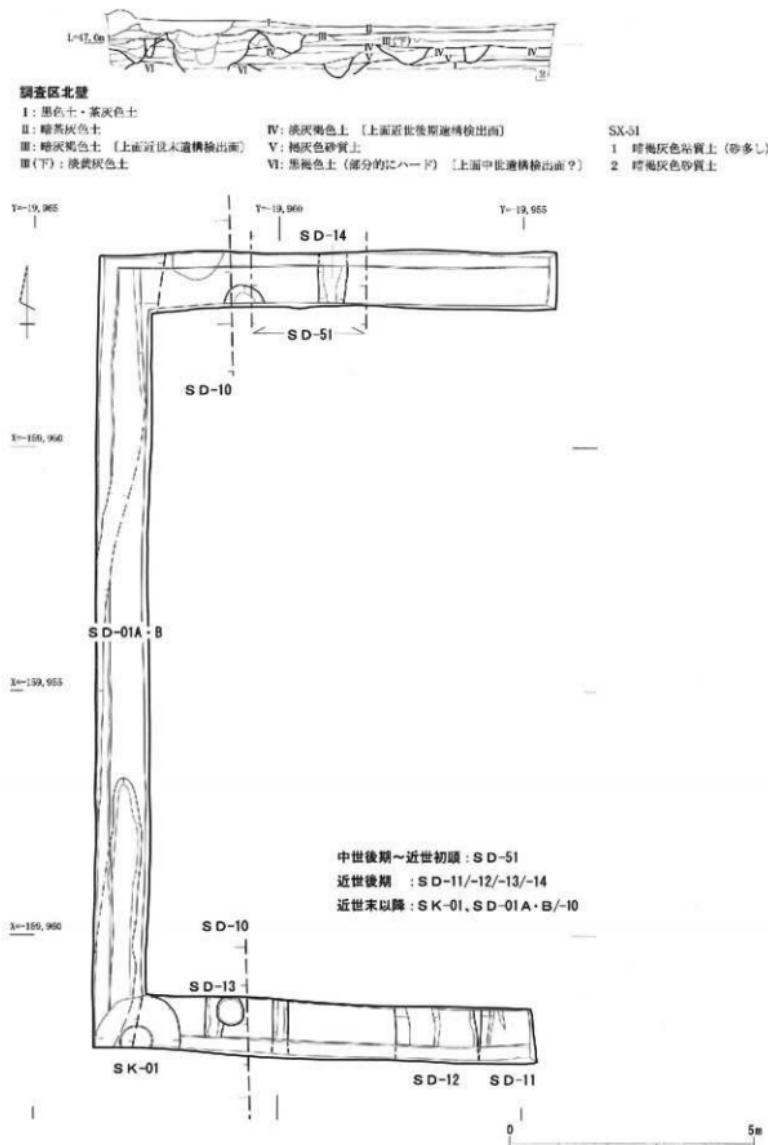
今回の調査では近世以降の遺構を中心的に検出した。遺構の切り合いが激しく、基本層序を確認できたのは調査区の一部にとどまる。周辺の調査では、上面が弥生時代の遺構検出面となる黄灰色粘土系の地山層を確認する場合が多いが、本調査地ではその地山層が確認できなかった。



1. 調査区西側調査状況（南から）



2. SK-01（北東から）



第16図 調査区平面図及び北壁土壘堆積図 (S = 1/100)

5. 十六面・薬王寺遺跡 第26次調査

1. 遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、奈良盆地の中央、標高48m前後の沖積地に立地する。これまでの調査で、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。弥生時代から古墳時代前期にかけて、遺跡南東部に周溝墓が築造される。古墳時代中・後期にも遺跡南東部で古墳が築造される。また、古墳時代中期には遺跡南部～南西部にかけて古墳時代中・後期のまとまった集落が形成される。遺跡北半では古代の埋没水田がみられる。平安時代末～鎌倉時代には、現在の十六面集落の南側（字十六面周辺）で墨書き器や箸・扇子・墨書きのある方形曲物容器などが出土しており、遺跡の特殊性を窺い知ることができる。室町時代には、遺跡中央北半に環濠をもつ屋敷地が形成される。周囲の小字名から、保津氏居館跡の推定地となっている。

今回の調査地は、薬王寺環濠集落の北東端に位置する。東側に隣接して3面コンクリート張りの水路があり、これが近世の環濠跡とみられる。調査により、現在の環濠跡よりも内側に先行する環濠跡が検出できる可能性が考えられた。

2. 調査の成果

調査地の現状は宅地である。北半がガレージ、南半が畠として使用されていた。

（1）層序

第Ⅰ層：黄褐色砂礫土、第Ⅱ層：暗褐色土、第Ⅲ層：暗茶灰色土（シルト質）、第Ⅳ層：茶灰色粘土、第Ⅴ層：淡灰褐色土、第Ⅵ層：青灰色粘土、第Ⅶ層：暗灰青色粘土、第Ⅷ層：黒褐色粘土。

遺構検出面は、第Ⅳ層上面が近代であるが、以下は全体が溝状の堆積内となる。S D-02の西肩立ち上がりがある調査区西端では、約46.9mで地山層の暗茶灰色粘土、約46.7mで黒褐色粘土が確認できる。

（2）遺構と遺物

近世後半～近代の遺構

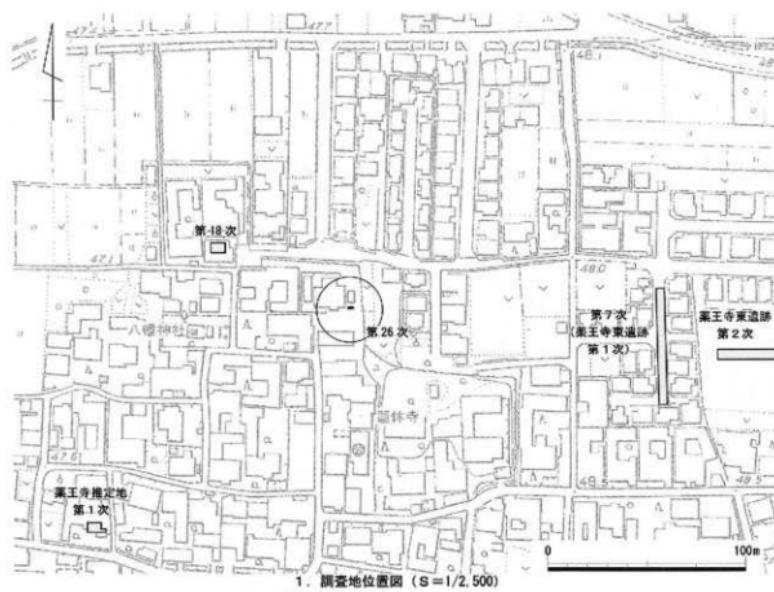
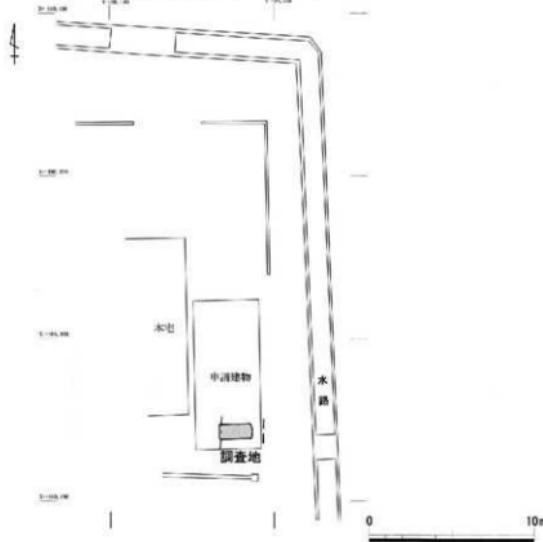
S D-02 調査区全体が南北方向の大溝内であった。検出面からの深さ0.6mを測る。溝底で西肩



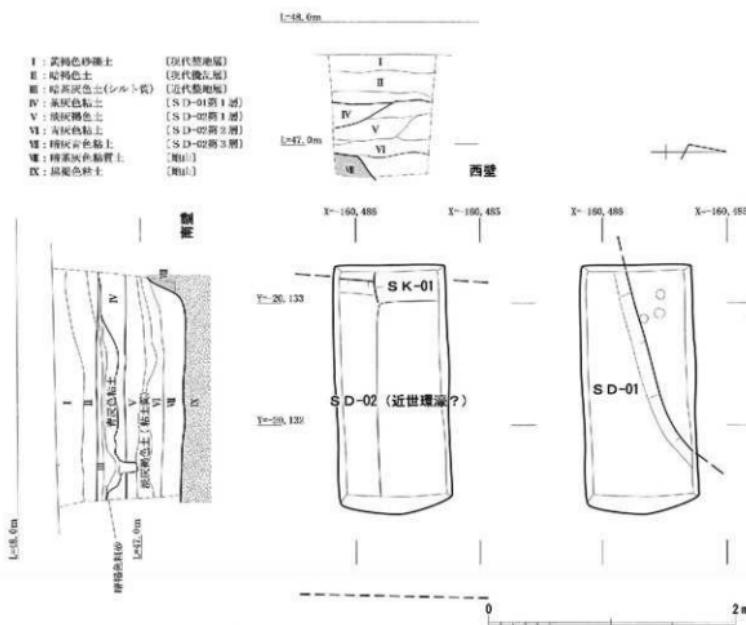
1. 調査区全景（東から）



2. 南壁土層堆積状況（北から）

1. 調査位置図 ($S = 1/2,500$)2. 調査区位置図 ($S = 1/300$)

第17図 十六面・薬王寺遺跡 第26次調査地及び調査区位置図



第18図 遺構平面図及び南壁・西壁土層堆積図 (S = 1/40)

への立ち上がりを確認したものの、溝幅は明らかにできなかった。近世後半の陶磁器等が出土した。ただし、SK-01を切ることから、近代頃まで開口していた遺構の可能性がある。

SD-01 調査区南側で検出した東西方向の溝跡である。深さ0.2m。北肩のみの検出であり、幅は明らかでない。遺物が僅少であるため、詳細な時期は明らかでないが、SK-01を切ることから、近代頃の遺構と考えられる。

SK-01 調査区西端で検出した土坑状の遺構である。SD-02に切られる。大半が未掘であり、詳細は明らかでない。近世末～近代の陶磁器、瓦等が多数出土した。SD-02が西側へ分岐あるいは屈曲したものである可能性もある。

3.まとめ

今回の調査では、薬王寺環濠集落の字「北垣内」北東端の状況を確認することができた。近世末～近代頃まで現環濠の一回り内側にも環濠（SD-02）があり、二重環濠を形成していた可能性が考えられる。これが、近代以降に屋敷地化し、区画溝（SD-01）が掘削されたのであろう。

今回の調査は極めて小規模なものであったが、薬王寺環濠集落の構造を知る上で重要な成果が得られた。特に、今回検出した大溝の性格は内濠的なものとなるかもしれない。

6. 羽子田遺跡 第35次調査

1. 遺跡・既調査の概要

羽子田遺跡は、奈良盆地の中央、標高48m前後の沖積地に立地する。これまで34次にわたる発掘調査を実施しており、遺跡の全体像が徐々に解明されつつある。特に、弥生時代中期～古墳時代前期の集落・古墳時代前期～後期の古墳群は内容的にも充実しており、本町の歴史を解明する上で欠かすことのできない重要な遺跡となっている。

今回の調査は、遺跡中央西側での宅地分譲開発に伴う事前調査として実施した。東側及び南側隣接地ではいずれも羽子田古墳群関連の遺構を検出しており、本調査地にも古墳群が拡がることが考えられた。また、弥生時代末～古墳時代前期の集落域の西側隣接地となっており、地形的に落ち込みとなっている可能性も考えられた。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の層序は、調査区東半と西半で大きく異なる。ここでは比較的安定している調査区東半の層序を示す。

第Ⅰ層：黄褐色砂礫土、第Ⅱ層：青褐色土、第Ⅲ層：茶灰色土、第Ⅳ層：暗灰褐色粘質土、第Ⅴ層：黒褐色粘土（砂混）、第Ⅵ層：黄褐色粗砂、第Ⅶ層：黄白色粘土。

調査地は、近年までは水田であったが、平成19年度より徐々に土入れがおこなわれ、調査時点では旧水田面より0.6～1mの造成がなされていた。遺構は、地山層の第V層上面（標高47.6m）で検出した。なお、調査区西半では遺構面が一段低く、検出標高は47.4m前後となる。また、第V層に相当するのが黄灰色シルト、その下が淡青灰色シルトで、湧水が激しく軟弱な地盤であった。

(2) 遺構と遺物

弥生時代の遺構

S R-201 調査区東端で検出した北西～南東方向の河跡である。幅6m以上を確認したが、調査区外に拡がるため規模は明らかでない。深さ0.7m以上を測る。主な堆積土は明褐色粗砂で、上層から弥生時代中期前半の細頸壺1点が出土している。

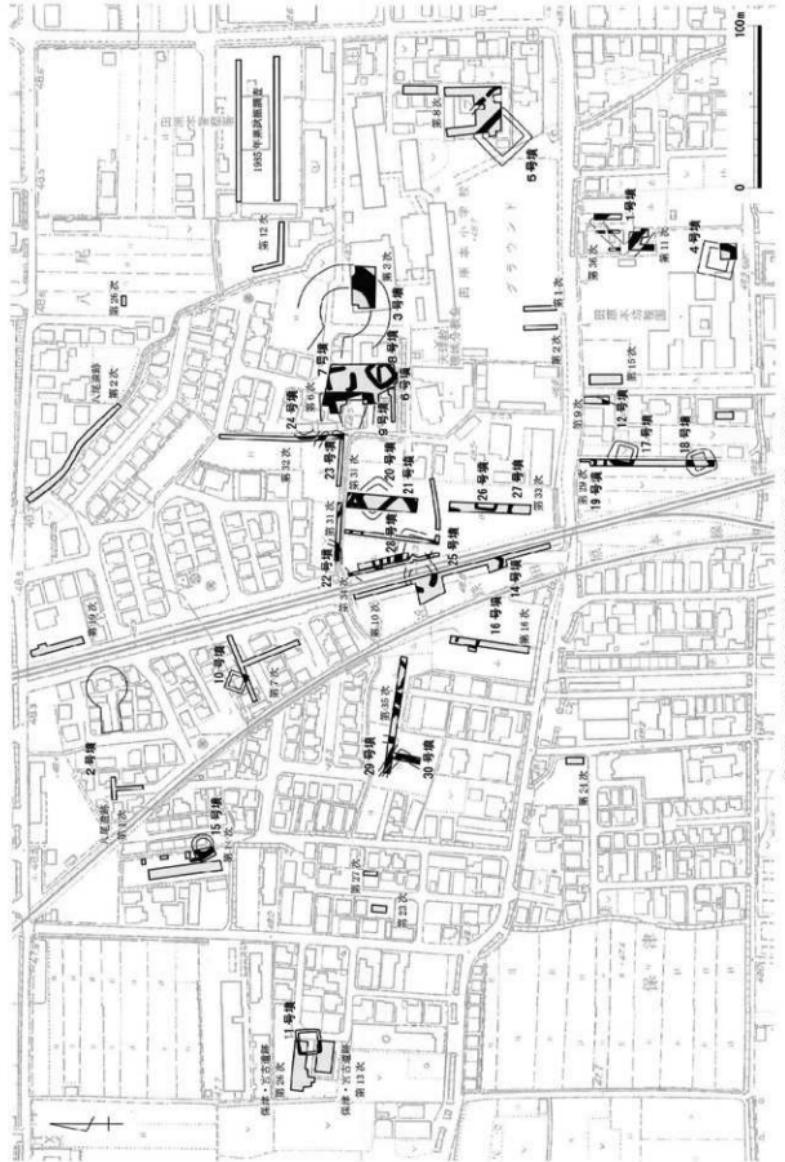
S D-110 調査区東端で検出した溝状遺構である。S R-201上面の粗砂層との境界が不明瞭であり、河跡の埋没と前後して形成された遺構である可能性が考えられる。弥生時代とみられる土器片が少量出土している。

S D-105 調査区中央で検出した、北東～南西方向の溝である。規模は幅1m、深さ0.2m前後を測る。上層より弥生時代前期頃の壺底部1点が出土している。

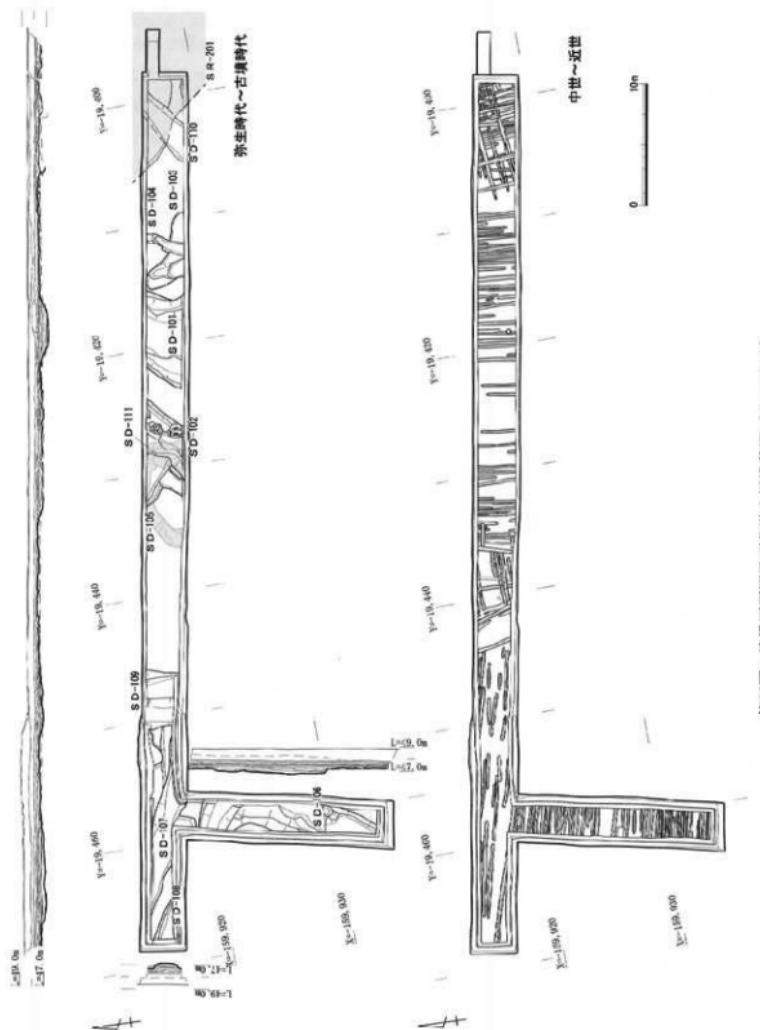
S D-111 調査区中央、S D-105の東側で検出した北東～南西方向の溝である。規模は幅1m、深さ0.2mを測る。中層より、サヌカイト製石剣・弥生時代前期頃の鉢小片が出土した。

古墳時代の遺構

S D-101 調査区東半で検出した、北東～南西方向の大溝である。幅6m、深さ0.8mを測る。



第19図 羽子田遺跡の調査と占墳の位置 (S = 1/3,000)



第20図 遺構平面図及び北壁土塁堆積図 (S = 1/400)

東肩南半は南東方向に屈曲する。当初、方墳の西側周濠となる可能性も考えていたが、東側20mまで対応する溝が確認できなかったことから、古墳群内に掘削された区画溝と考えられる。6世紀頃の須恵器大甕片などが出土した。

S D-103 調査区東側、S D-101の東肩付近で検出した北西－南東方向の溝である。幅2m前後、深さ0.1～0.2mを測る。4世紀後半頃の埴輪片が出土しており、古墳周濠となる可能性もある。ただし、全体に削平されて平面形が不明瞭となっており、その性格を決定することは難しい。

S D-104 S D-103に切られる北東－南西方向の溝である。幅1m前後、深さ0.2m。遺物がほとんど出土していないため、詳細な時期と性格は明らかでない。なお、堆積土は黒褐色土を中心としたブロック土であった。

S D-102 調査区中央付近で検出した溝状遺構である。北東－南西方向であるが、調査区北端では西北西方向に分歧する。溝の東肩付近に不整形の窪みがあり、一部は足跡とみられる。

S D-107・109（羽子田29号墳） 調査区西端で検出した方墳とみられる遺構である。西北西－東南東方向の溝 S D-107が南側周濠、南北方向の溝 S D-109が東側周濠と考えられる。部分的な検出であり、古墳の規模は明らかでない。S D-107が幅約3m、深さ0.6mを測り、S D-109が幅約4m、深さ0.3mを測る。S D-109からは顯著な遺物は出土していないが、S D-107からは5世紀後半頃の土師器坏・須恵器等が出土した。

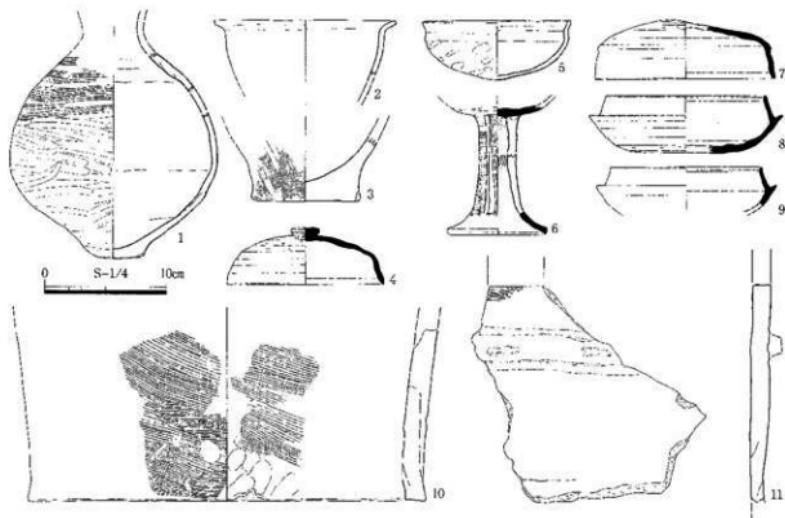
S D-106・108（羽子田30号墳） 調査区南西端で検出した方墳とみられる遺構である。北北東－南南西方向の溝 S D-106が東側周濠、西北西－東南東方向の溝 S D-108が北側周濠となるとみられる。S D-106が幅約4.5m、深さ0.7mを測り、S D-108が幅約2m、深さ0.5mを測る。なお、羽子田29号墳のS D-107と30号墳のS D-108は、幅1mを堤状に残してほぼ平行に掘削されている。S D-108からは6世紀前半頃の須恵器片等が出土した。

中近世の遺構

素掘小溝群 調査区全体で素掘小溝群を検出した。大半が幅0.2～0.3m、深さ0.1m前後を測る。調査区東端より10mの区間は座標軸にちかい南北方向及び東西方向で、堆積土から近代～現代の遺構とみられる。また、調査区東端より10mから40mまでの区間は北北東－南南西方向で、上に堆積土が茶灰色土の溝（近世？）が中心であるが、一部灰褐色粘質土の溝（中世？）も含まれる。また、東端より44mで遺構検出面が一段深くなるが、この境界付近には北北西－南南東方向の小溝が重複して1条、2m西側にも1条みられる。この斜行溝を境界として、調査区西側では西北西－東南東方向の小溝群が拡がる。中世頃のものが大半とみられる。

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代～古墳時代の遺構を多く検出した。羽子田古墳群に関わる遺構としては、5～6世紀の方墳2基、大溝1条を検出した。調査区西半は地盤こそ不安定であるものの、周濠が比較的深く残っており、微凹地状の地形に築造された小規模な方墳が沖積作用により徐々に埋没していったものである可能性がある。一方、調査区東半は地盤が安定している分、遺構面の削平が進んでいるとみられる。古墳時代前期の埴輪片も出土していることから、比較的短期間で削平された前期古墳が存在した可能性がある。

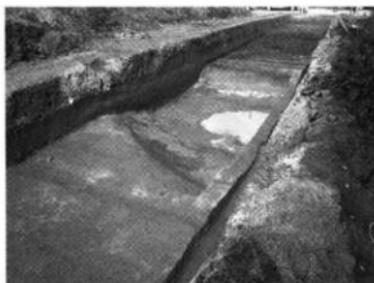


第21図 出土した遺物

今回の調査では、弥生時代前期～中期前半の遺構が散在することも確認している。弥生時代前期の溝 S D-105及びS D-111は、その位置関係から方形周溝墓となる可能性も考えられる。また、調査区東端では中期前半に埋没したとみられる河跡を検出している。これらの遺構の位置づけについては今後の検討が必要となるが、羽子田遺跡が当初想定していたよりも早くから何らかの形で遺構の形成がおこなわれるような場所となっていたようである。なお、小片ながら縄文時代後期墳の土器片が1点出土している。盆地低地部の田原本町としては希少な出土事例であり、本遺跡周辺が保津・宮古遺跡などと同様に早くから居住可能となった微高地の1つであった可能性が考えられる。



1. 調査区全景（北西から）



2. SD-101完掘状況（南西から）



3. SD-106完掘状況（南から）



4. SD-108完掘状況（南から）



5. 中近世遺構完掘状況（東から）

7. 羽子田遺跡第36次調査

1. 遺跡・既調査の概要

羽子田遺跡は、集落遺構とともに遺跡全体に4世紀末～6世紀の小規模古墳が多数散在し、羽子田古墳群が形成されていたことが明らかになっている。

この遺跡は、国の重要文化財「埴輪牛」が出土した遺跡としてよく知られている。これは明治30年の病舎建設時に出土したもので、牛形のほか盾持人や蓋形の形象埴輪が出土している。この埴輪群の性格については、当初、低地から出土したこともあって水に関連する祭祀行為に伴うものとの説もあったが、近年の低地での発掘調査の進展によって削平を受けた埋没古墳という認識が一般的になった（羽子田1号墳）。しかし、この出土地点周辺での調査はなく、その実態は不明であった。

このような状況の中で、平成9年度に当地隣接地の開発に伴い、第11次調査を実施した。調査の結果、古墳周濠を検出し、濠中より盾持人とみられる人物埴輪頭部がほぼ完全な形で出土した。また、この溝を破壊する形で病舎建設時の擾乱も検出したことから、「埴輪牛」の出土地点もほぼ同地点であったと推定できるようになった。

今回の調査は、第11次調査の成果に基づき推定した古墳の墳丘内にあたる位置で実施した。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は宅地である。工事に先立って既存家屋の解体がおこなわれたため、全体に搅乱層が覆う。ここでは、搅乱の影響が最も少なかった第2トレンチの層序を中心に示す。ただし、地山層については第1トレンチのデータを用いている。

第Ⅰ層：暗褐色土（黒褐色粘土ブロック混）、第Ⅱ層：茶灰色土、第Ⅲ層：淡灰褐色粘質土、第Ⅳ層：黒褐色土、第Ⅴ層：橙褐色土、第Ⅵ層：黒褐色土、第Ⅶ層：黄灰色粘土（シルト質）。

第Ⅳ層は弥生時代の遺物包含層である。第Ⅴ層以下は地山層である。

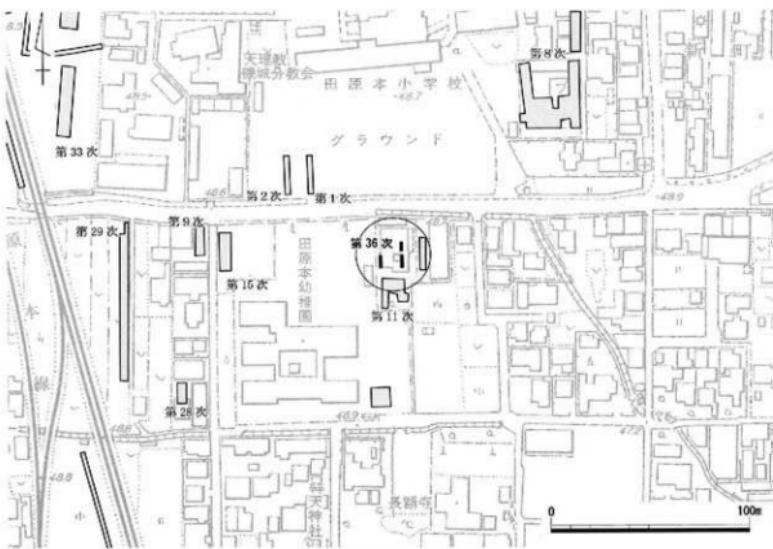
(2) 遺構と遺物

古墳時代の遺構

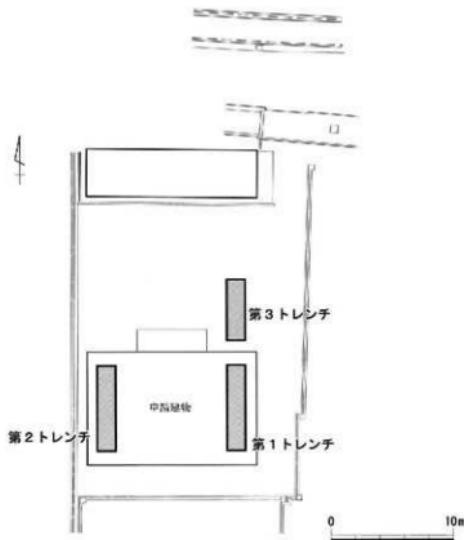
S D-1101 第1トレンチ北半で検出した古墳時代後期の大溝である。南肩のみの検出で、北東～南西方向である。第3トレンチで確認した北肩との位置関係から、推定幅約6m、深さ0.6mを測る。上層及び中層から須恵器大甕片と円筒埴輪片が出土した。位置関係から羽子田1号墳の前方部周濠とみられる。

S D-2101 第2トレンチ南端で検出した古墳時代後期の大溝である。北肩のみの検出で、北東～南西方向である。深さ0.5mまで掘削したが、完掘していない。中層からは、ほぼ完形の円筒埴輪1点と形象埴輪の台部になると思われる円筒状の埴輪1点、家形埴輪とみられる埴輪片等が出土した。位置関係から羽子田1号墳の前方部周濠とみられる。

S D-2102 第2トレンチ北西端で検出した溝である。南肩のみ検出した。北東～南西方向で、幅は明らかでない。深さ0.3mを測る。土師器等が少量出土した。

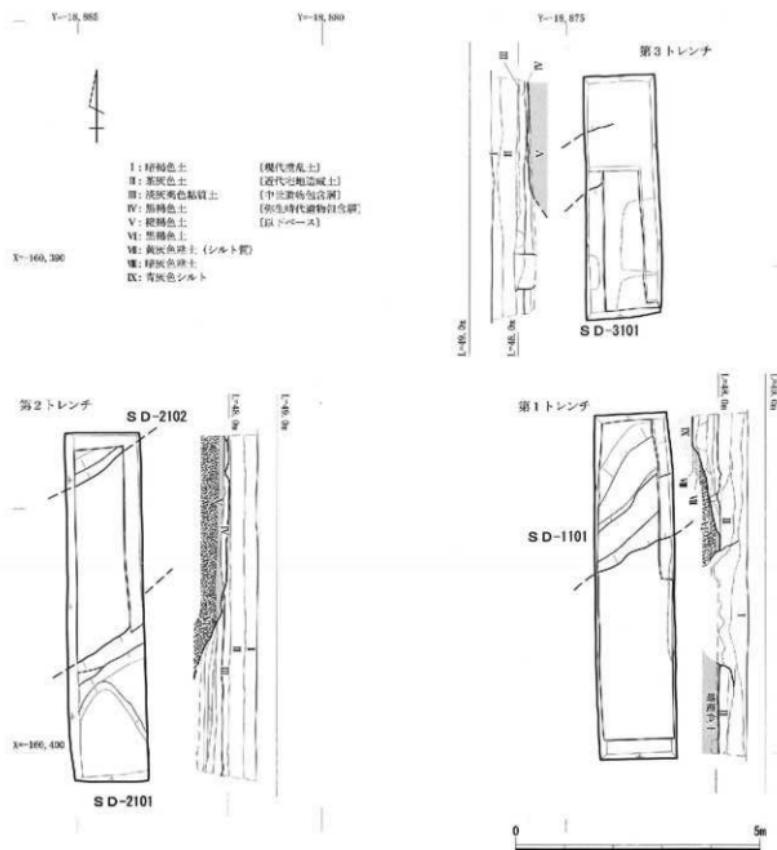


1. 調査位置図 ($S=1/2,500$)



2. 調査区位置図 ($S=1/400$)

第22図 羽子田遺跡 第36次調査調査地及び調査区位置図



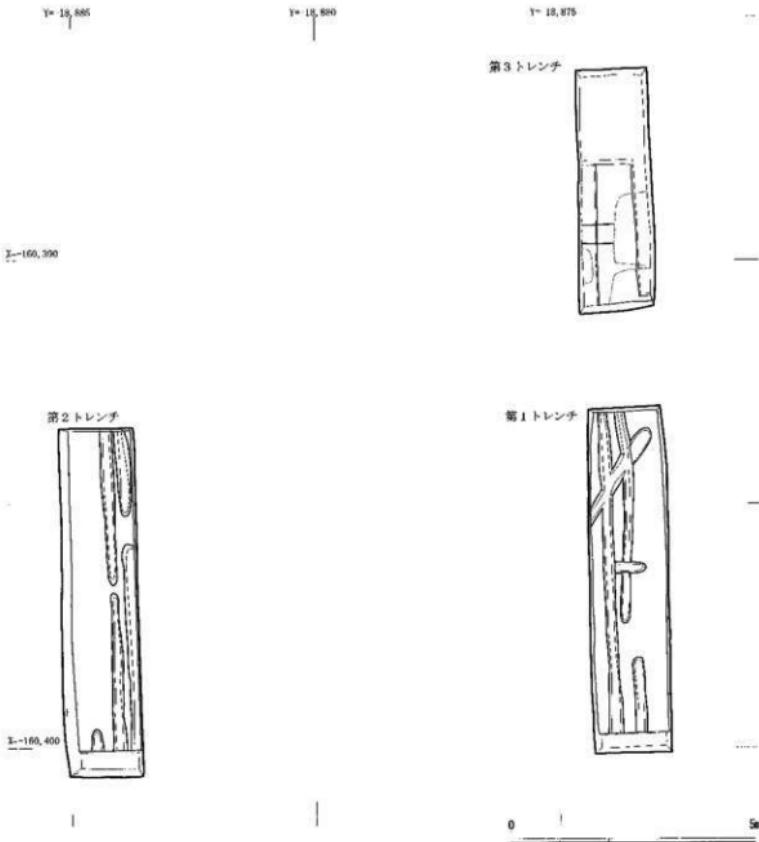
第23図 古墳時代の遺構 (S = 1/100)

中世の遺構

素掘小溝群 第1・第2トレンチ全体で南北方向を基本とする素掘小溝群を検出した。時期は不詳であるが、層序等から中世に遡る遺構となる可能性が考えられる。このことから、本古墳の削平は比較的古いと考えられる。

近世～近代の遺構

粘土探査坑 第1トレンチ東端及び第3トレンチ東半で検出した、方形を基本とする土坑である。周囲の調査成果から、近世以降の粘土探査坑と考えられる。特に第3トレンチでは南北に整然と並ぶ形で掘削されているようである。平成9年度の第11次調査でも、調査区北半では粘土探査坑による擾乱が激しかったことから、北側の東西道路を搬出ルートとして周囲で粘土探査が盛んにおこな

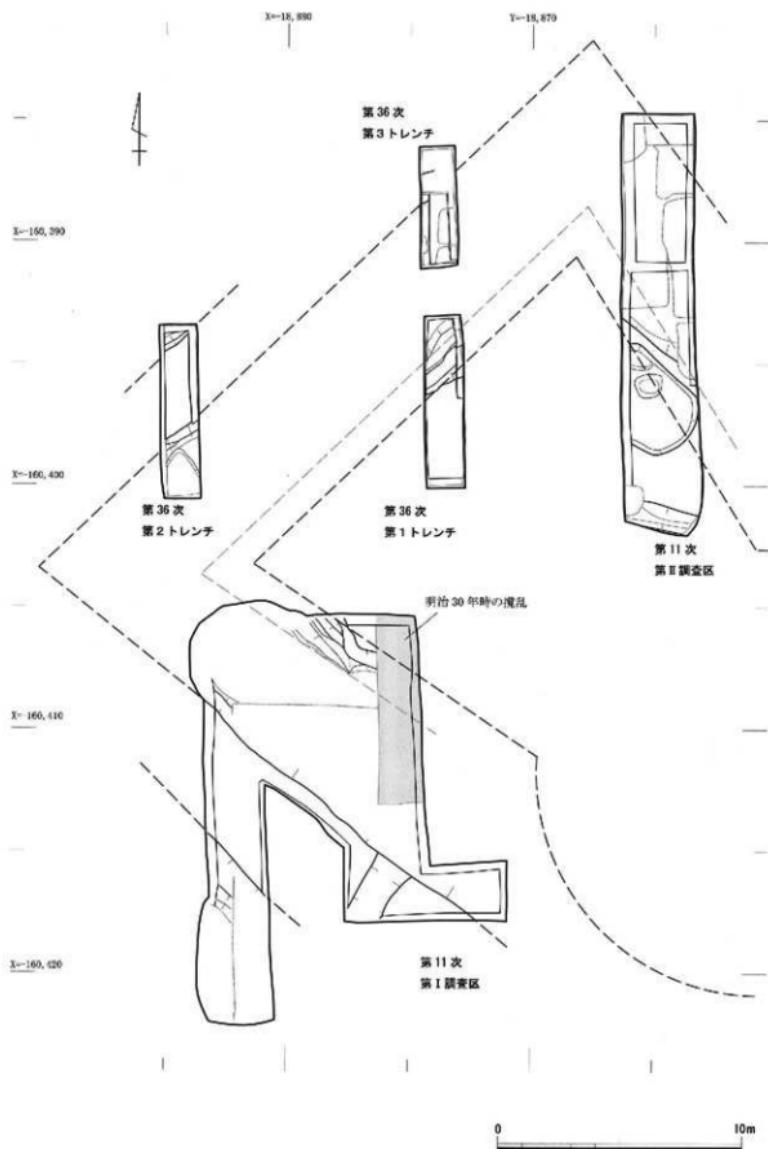


第24図 中世の遺構 (S = 1/100)

われていたと考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、羽子田1号墳の墳形を復元する上で重要なデータを得ることができた。6世紀前半の築造とみられる羽子田1号墳は、第11次調査の成果及び出土した埴輪群の内容から、前方後円墳となる可能性が考えられてきた。第11次調査で判明したのは古墳北東側及び南西側の一部についてのデータのみであったが、今回の調査で古墳北西側の状況が判明したことで、より墳形を絞り込めるようになった。北西側の周濠が直線的であったことから、南東側に後円部がつく前方後円墳となる可能性が高まった。ただし、南東側の状況が未だに明らかとなっていないため、現状のデータのみでは方墳となる可能性も否定できない。今後、さらなる調査によって周辺のデータを蓄積し、羽子田古墳群の獣主墓の1つとみられる1号墳の墳形を明らかにしていく必要があろう。



第25図 羽子田1号墳 墳形推定図 (S = 1/200)



1. 第1トレンチ全景（北から）



2. 第2トレンチ全景（南から）



3. SD-1101東壁土層堆積状況（西から）



4. SD-2101遺物出土状況（北西から）



5. 第3トレンチ西壁土層堆積状況（北東から）



6. SD-2101出土埴輪

8. 多遺跡 第22次調査

1. 遺跡・既調査の概要

多遺跡は、奈良盆地の中央、標高52m前後の沖積地に立地する。大字多周辺は古代氏族多氏の根拠地とされ、遺跡中央に鎮座する式内大社多坐弥志理都比古神社（多神社）は多氏の祖である神八井耳命らを祀っている。

多遺跡は、昭和47年の飛鳥川改修工事で土器などが多数出土したことから広く認識されるようになった。その後水路改修やリハビリセンター建設などに伴って調査が重ねられ、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡であることが明らかとなってきた。

今回、多遺跡東側で南北200mに及ぶ水路工事が実施されることになり、事前の発掘調査を実施した。調査地の北側隣接地では、平成11年に第19次調査が樅原考古学研究所により実施され、弥生時代中～後期の遺構を多数検出している。このうち、北西～南東方向の大溝3条は多集落の北東部を包む環濠とみられ、その南側に集落域が拡がると考えられた。従って、今回の調査区は、環濠帯に囲まれた居住区部分に該当することが予想された。

2. 調査の成果

（1）層序

調査地の現状は水路である。調査区は南北に長く、中世大溝と重複する箇所も多い。ここでは、水路肩部に相当したため遺構の残存が良好であった第1トレンチ南半西での層序を示す。

第I層：暗茶灰色土、第II層：淡褐灰色粘質土（ブロック状）、第III層：褐灰色土、第IV層：暗灰褐色土、第V層：暗褐色土、第VI層：黒褐色土、第VII層：黄褐色微砂、第VIII層：黄灰色シルト。

第III層は近世、第IV層は中世、第V層は古代？、第VI層弥生時代の各時代遺物包含層とみられる。第VII層以下は地山層である。

調査区となった水路は、調査時には標高約51.5mまで埋没しており、0.5～0.6mの厚さで近代～現代のヘドロが堆積していた。水路底の標高は50.9m前後となる。その結果、調査区の大半は弥生時代の遺構が0.3m前後削平された状態になっていた。調査では、水路の近代以降の堆積層を重機により除去し、以下は人力により発掘調査を実施した。

（2）遺構と遺物

弥生時代前期の遺構

S K-3151 第3トレンチ中央で検出した土坑である。木器貯蔵穴である可能性が考えられる。東西方向に長軸のある長方形の木器貯蔵穴となる可能性が高い。幅1.4m、深さ1.2mを測る。下層より弥生時代前期（大和I-1-b様式）の壺などが出土した。

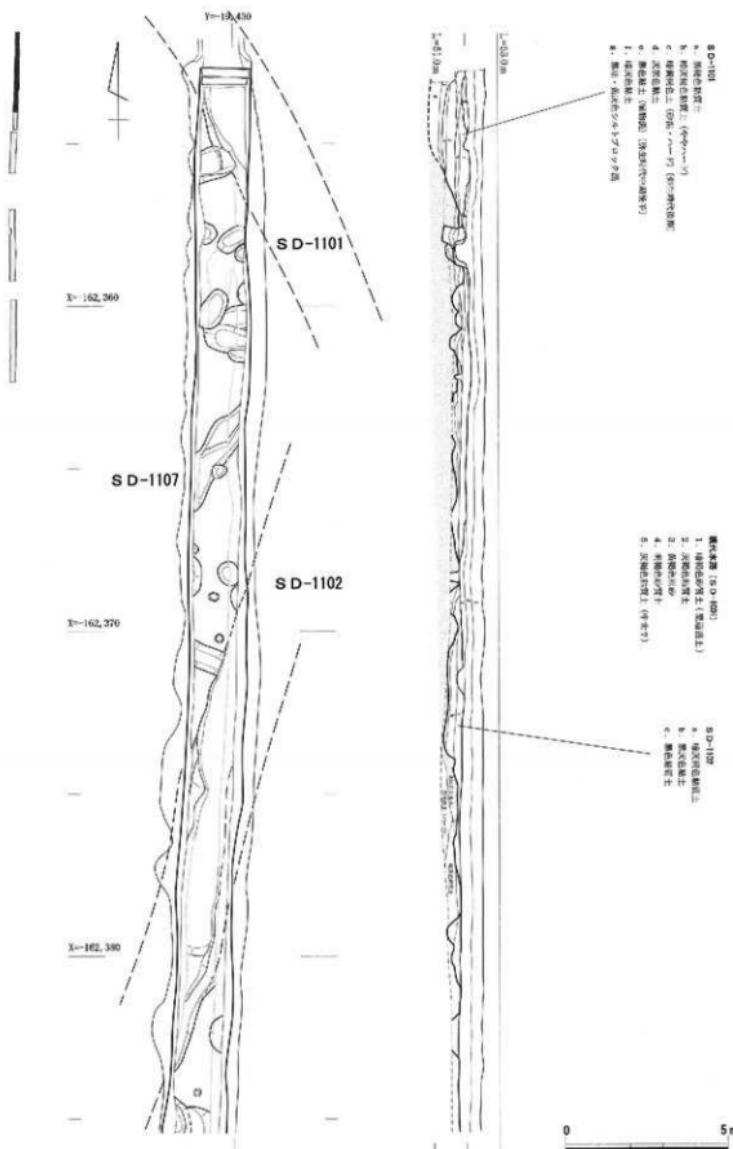
弥生時代中期初頭の遺構

S K-2109 第2トレンチ中央で検出した長方形の土坑である。長軸1.66m、短軸0.6m、深さ0.3m前後を測る。その形状から木棺墓となる可能性も考えられる。

S D-1104 第1トレンチ南部で検出した、東西方向の溝状遺構である。幅0.9m、深さ0.5m前後。



第26図 調査地位置図 ($S = 1/2,500$)



第27図 第1トレーナー北半の遺構（弥生時代）（S=1/150）

特に東半が一段深くなり、土器が多数出土している。大和第Ⅱ～Ⅰ様式頃の遺物が出土した。

弥生時代中期中頃～後半の遺構

S D-1101B 第1トレンチ北端で検出した北北西～南南東方向の溝状遺構である。幅不明、深さ0.5m。大和第Ⅳ様式頃の土器が出土した

S D-1101C S D-1101Bより先行する人溝である。大和第Ⅲ・Ⅱ様式頃の土器が出土した。調査区北端での検出であるため、規模は明らかでない。また、東西の壁面が崩壊したため溝底を確認することができなかった。本遺構は多集落の北東側環濠となる可能性が考えられる。

S D-2101B 古墳時代前期の溝 S D-2101の下層で検出した、北東～南西方向の大溝である。深さ0.8m、幅2.6mを測る。大和第Ⅲ～Ⅳ様式前後の土器が出土した。

S D-3101 第3トレンチ南端で検出した、北東～南西方向の大溝である。推定幅1.8m、深さ0.8m前後を測る。弥生時代中期頃の土器が出土した。多集落の南東側環濠となる可能性がある。壁面が崩壊したため完掘することができなかった。

S K-2107 第2トレンチ中央から北半にかけて、直径1～1.5m、深さ0.2～0.4mの土坑が3ヶ所認められる。遺構の形状から、柱穴となる可能性も考えられる。

建物跡 第3トレンチの北半で柱穴を多数検出した。直径0.3m前後、深さ0.1～0.2m前後のものが多い。堅穴住居等に伴う柱穴であろう。時期は明らかでないが、弥生時代中期～後期の遺構となる可能性が高い。

弥生時代後期の遺構

S D-1102 第1トレンチ中央で検出した、北北東～南南西方向の溝である。幅1m前後の調査区内でやや蛇行気味に掘削されているため、推定幅1.4m前後とみられるものの正確な幅は明らかでない。上層より大和第VI～Ⅱ様式を中心とする土器が多数出土した。また、下層からは大和第V～Ⅶ～Ⅰ様式の土器が出土した。

S D-1101 第1トレンチ北端で検出した、北北西～南南東方向の溝である。下層遺構として弥生時代中期後半の溝、中期中頃の溝が存在するため、これらの埋没後に掘削された浅い溝となる可能性がある。調査区外に抜がるため規模等は不明である。

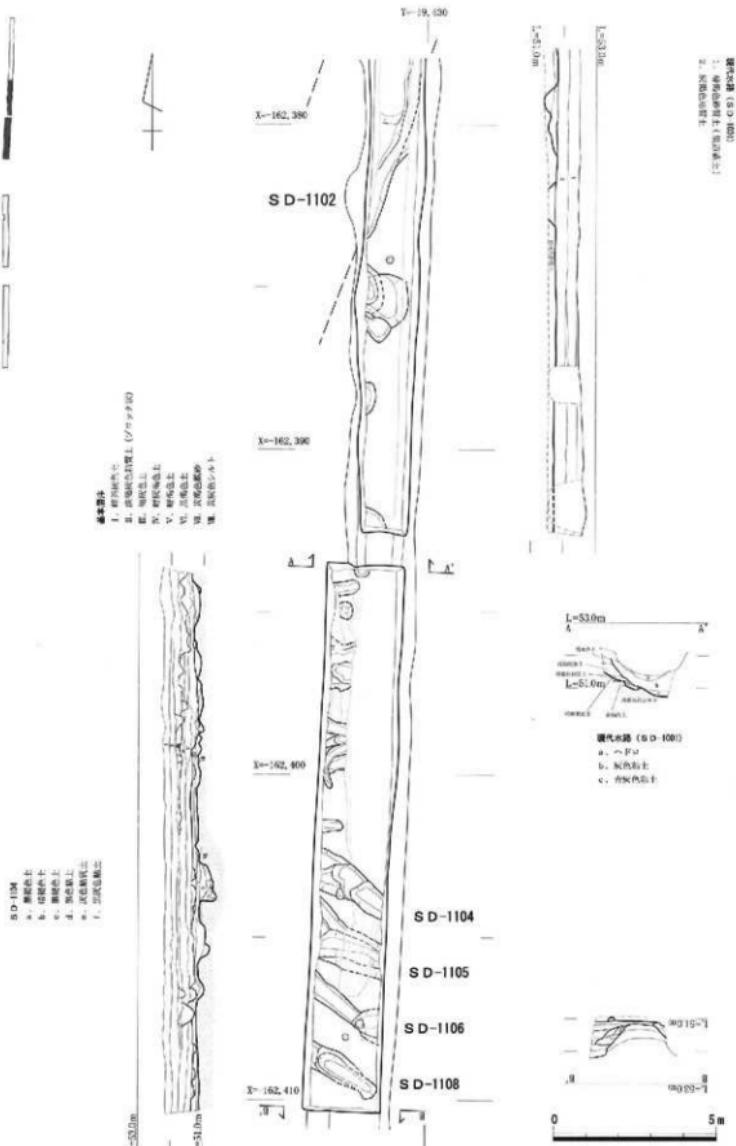
S D-3102 S D-3101の北側に隣接して掘削された、北東～南西方向の大溝である。幅2m、深さ0.25m前後を測る。弥生時代後期前半頃の遺物が出土した。

S D-3103B 第3トレンチ北端で検出した、北北西～南南東方向の溝である。幅0.8m、深さ0.5mの溝である。古墳時代の溝 S D-3103の下層遺構として検出したが、遺物が少量であり、詳細な時期は明らかでない。

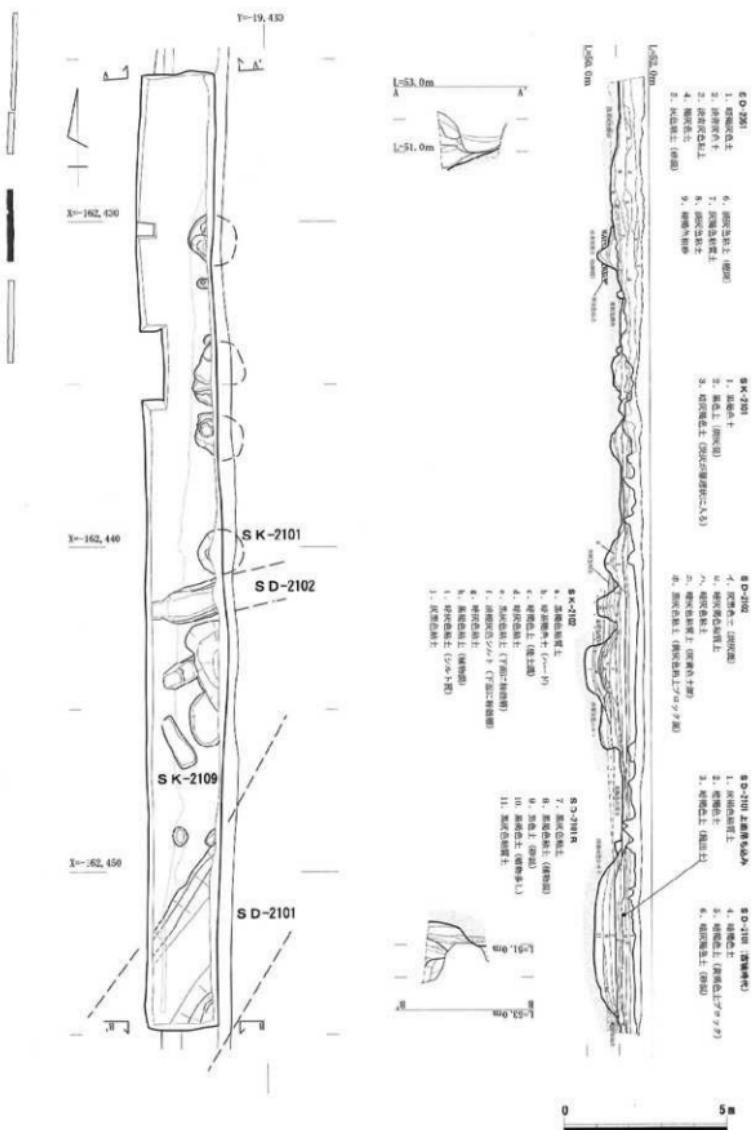
古墳時代の遺構

S D-2101 S D-2101Bを再掘削した人溝である。幅2.6m、深さ0.4mを測る。中層より4世紀代の土器が出土した。なお、この溝の埋没後に形成された堆積層から古代とみられる鏡1点が出土した。鏡の直径は5.1cm、5ヶ所に不明瞭な彫らみがほぼ等間隔に配置される。外区を欠損した海獸葡萄鏡の粗悪なコピー品とみられる。鏡面の研磨がみられず、祭祀用に製作された可能性がある。

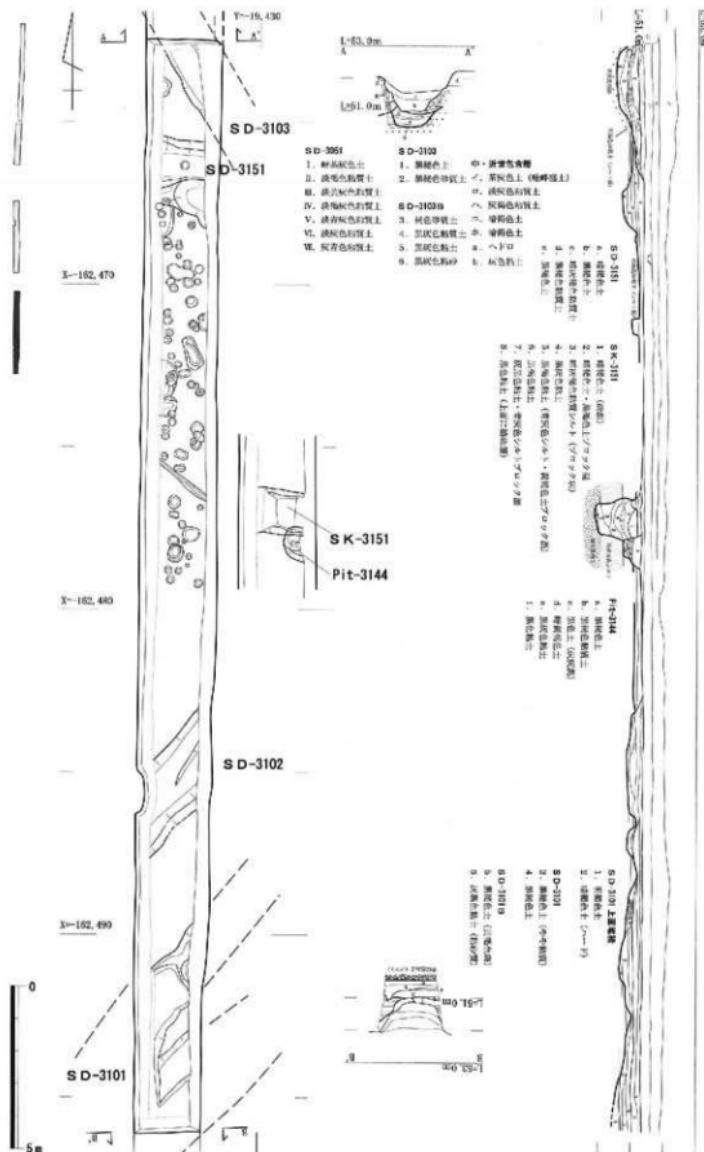
S D-3103 第3トレンチ北端で検出した、北北西～南南東方向の溝である。幅1.2m、深さ0.2mを測る。上層から布留式新段階の土器が出土した。S D-2101に直交する溝と考えられる。



第28図 第1トレンチ南半の遺構（弥生時代）(S=1/150)



第29図 第2トレンチの遺構（弥生時代～古墳時代）(S-1/150)



第30図 第3トレチの遺構（弥生時代～古墳時代）（S-1/150）

S K-2101 第2トレンチ中央で検出した土坑である。平面円形とみられるが、調査区東端で検出した遺構であるため、規模は明らかでない。上層より小形丸底壺1点などが出土した。

中世の遺構

S D-1051 第1～3トレンチ全体で中世の南北方向の大溝を検出した。第1トレンチのS D-1051は、調査区のほぼ中央で検出したため、肩を検出していない。深さ12mを測る。土師質羽釜、軒丸瓦など15世紀前後の遺物が出土した。

S D-2051・3051 第2トレンチのS D-2051は、溝の東半が調査区内となっていた。横川幅は約0.5～1m程度である。東肩のみの検出であり、溝幅は明らかでない。深さ12mを測る。調査区北端付近で東側からの溝と合流している可能性があり、この付近のみ東側からの粗砂堆積が確認できる。また、北側延長部分となる第1トレンチ南端では一度溝が途切れていることから、第2トレンチの北側付近で西側へ屈曲している可能性もある。遺物は、土師質羽釜等が出土したが、遺物量はやや少ない。15世紀頃の遺構と考えられる。

第3トレンチのS D-3051は、幅0.2～0.4m程度が調査区西端にかかっていた程度である。その位置から、S D-2051と同一の遺構と考えられる。

近世の遺構

S D-1001・2001・3001 第1～3トレンチの全体が水路であった。現状の水路は、戦時中に軍隊が参加して水路掘削をおこなったものとのことである。国威高揚のため、国家事業として太安万侶を祀る社である小社神社を改修したと伝えられるが、この事業と一緒に作業として水路掘削がおこなわれたようである。

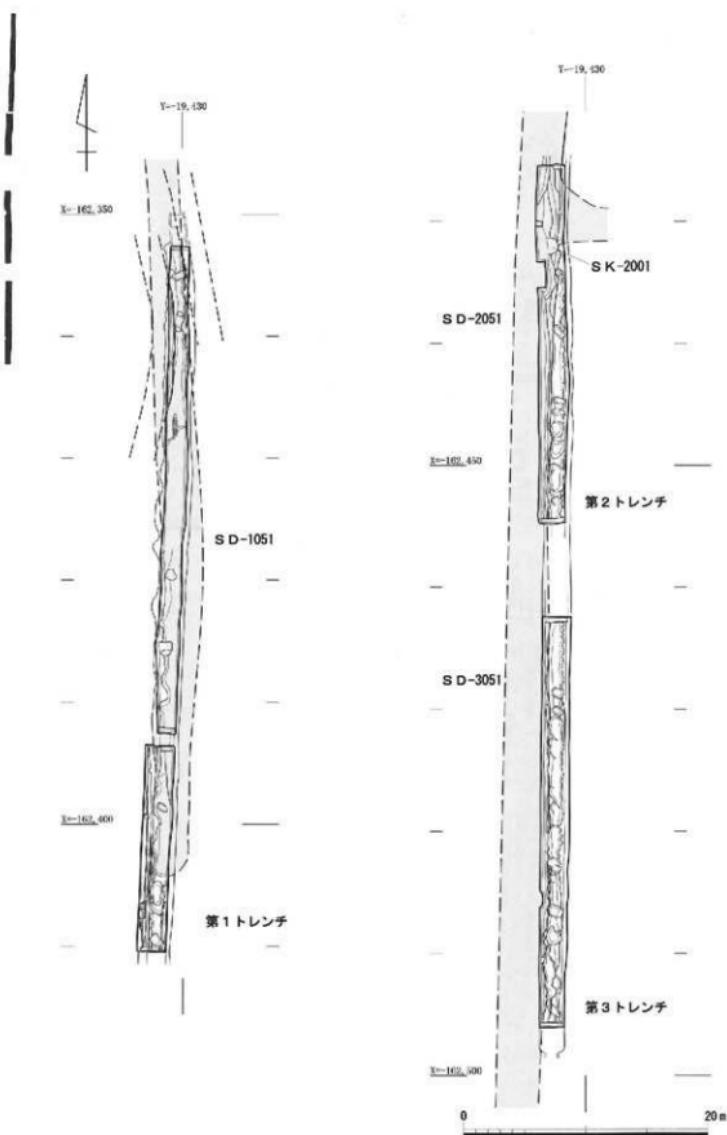
最終的な現代溝の幅は約1.5m、深さ1m前後を測る。平成10年前後に重機を入れて溝底を浚つたことで、所々深く重機により抉られた箇所がある。ただし、10年余りの間に0.5m以上のヘドロが堆積していたため、調査時の深さは0.5m程度となっていた。

3. まとめ

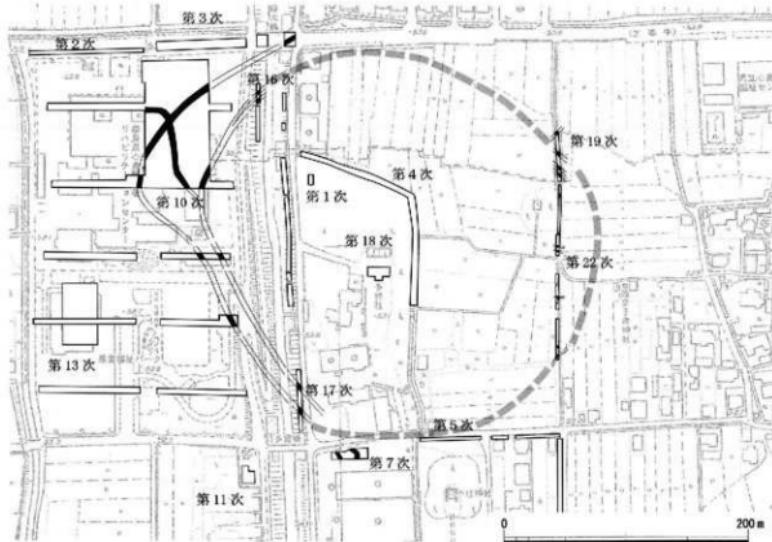
今回の調査では、不明な点が多かった多遺跡東部の状況が明らかとなった。弥生時代前期の多遺跡については、これまで大和第1～2様式に集落の形成が始まると考えられていたが、今回大和第I-1-b様式に適する資料が出土した。これにより、多遺跡の開始時期が1段階古くなることとなった。当期に始まると思われる遺跡は他にも保津・宮古遺跡があり、大和第I-1-a様式に唐古・鍵遺跡が成立し、若干遅れる形で保津・宮古遺跡、多遺跡が成立していったのであろう。

前期末～中期初頭の多遺跡は、遺跡西部で数条の大溝を検出しており、長径500m、短径300mにも及ぶ大環濠集落とする復元案も出されている。今回の調査ではこれに対応する遺構を検出することができなかつたが、遺構は調査区内に点在しており、全体が居住区内となっていた可能性がある。

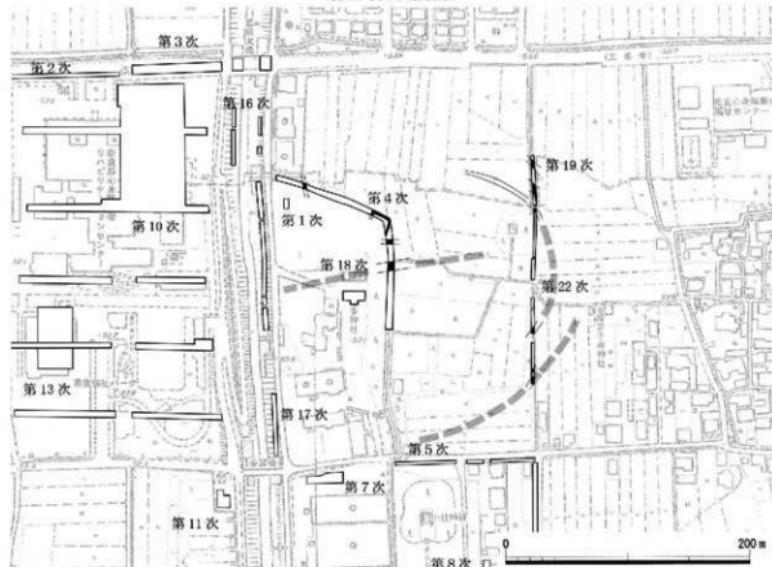
弥生時代中期中頃～後半の遺構としては、調査区北端及び南端で環濠とみられる大溝を検出した。また、調査区中央でも弥生時代中期に掘削され、古墳時代前期に再掘削される大溝を検出した。この大溝の北側では、柱穴となる可能性がある直徑1～1.5mの土坑3基を検出し、大溝の南側では堅穴住居に伴うとみられる直徑0.3m前後の柱穴を多数検出している。調査範囲が狭小であるため集落構造を解明するには至らなかったものの、大溝により性格の異なる2つの空間に区分されてい



第31図 中世の遺構 (S = 1/400)



弥生時代中期初頭



弥生時代中期後半

第32図 弥生時代中期の多遺跡 (S = 1/4,000)



第33図 弥生時代後期の多遺跡 (S = 1/4,000)

たことも予想される。

弥生時代後期の遺構は、調査区北部で検出した区画溝とみられる大溝で、大和第VI-2様式の遺物が多数出土した。ただし、大和第VI-3様式以降の遺物は少ない。多遺跡では弥生時代後期後半の遺構密度が低下する可能性があり、周囲でこの時期の集落が急増するとの比較して特異な現象ともいえる。

布留式新段階には弥生時代中期後半頃の大溝が再掘削される。また、大溝の北側では井戸とみられる土坑1基を検出している。全体的に遺構密度は高くないが、集落としては存続していると考えられる。

中世の多集落関連の遺構を検出した。現在の多集落は、かつて多神社の東側隣接地、字「宮ノ内」に所在したという話が地元に伝わる。今回検出した中世大溝は、字「宮ノ内」に所在したとされる中世多集落の東側を区画するものとなる可能性がある。遺物より、室町時代頃の遺構と考えられる。

本調査区の北側延長部分でおこなわれた第19次調査では、中世大溝を検出していない。大溝が観音堂の北東隅で西側へと屈曲している可能性も考えられる。この字「宮ノ内」の地割は、南端が西南西-東北東方向となっており、これに沿って受堤の痕跡が残る。一方、字「宮ノ内」の北東端には観音堂があり、その北側の土地区画は西南西-東南東方向となっている。この字「宮ノ内」は、西側の多神社、北東部の観音堂（本来は神宮寺として広い境内地をもっていた可能性がある）、南東部の集落という三者で構成されていたのであろう。

・多遺跡第22次調査出土の銅鏡について

今回の調査で、銅鏡1点が出土した。直径5.1cm、厚さ約2mm、重量約33gを測る。湯口を含めた周縁は研磨を受けており、表面は鋳放しのまま研磨をうけていない。また、鏡背面に不明瞭な凸部が5ヶ所ある。本来は何らかの文様であったものが、踏み返し（コピー）を繰り返す過程で本来の形状を失っていたものとみられる。鉢は長軸10mm、短軸7mmで、穴は塞がったまま仕上げられていない。鏡としての形態はあるが、実用として用いられた形跡は認めがたい。この銅鏡は、「海獣葡萄鏡」を模倣してつくられた古代の祭祀具であると考えられる。

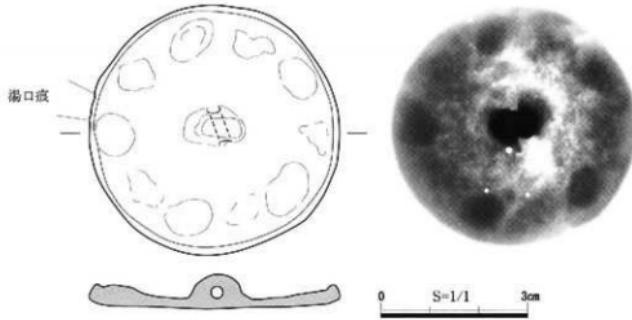
奈良時代に盛行した「海獣葡萄鏡」は、本来唐からの舶来品である。ただし、踏み返しにより国内でも盛んに模倣された。基本的には、内区に海馬（龍と雌馬との間に生まれたという神仙獸）などの神獸を配し、外区に葡萄唐草文を配する。大型品・中型品・小型品の区分があり、直径20cm以上の大型品は正倉院や春日大社等の宝物として伝世したものが有名である。中型品は、高松塚古墳などのように墳墓の副葬品として発見されたものが多い。直径10cm以下の小型品、特に粗悪な模倣品は祭祀に用いられることが多かったようである。また、外区が欠落した状態の模倣品も多くつくられた。本品はこの外区が欠落した小型海獣葡萄鏡と考えられる。

奈良時代の鏡は、寺院等の鎮壇具として埋納された事例があるほか、山、海、川への祭祀として用いられたものがあるとのことである。特に、小型海獣葡萄鏡や素文鏡は祓のまじないに用いられて条里を画する溝などに埋められることもあった。

今回、多遺跡から出土した銅鏡については、古墳時代中期に埋没した溝の底の上に堆積した古代墳の層から出土している。そのため、出土状況から用途を考えることは難しい。ただし、西側に近接する多神社の祭祀行為と全く無関係ではないだろう。古代の多神社における祭祀に関わる遺構・遺物はこれまで未確認であり、今回の調査で出土した遺物が古代多神社の信仰活動に関わる貴重な資料となる可能性は充分考えられる。

参考文献 杉山洋1999『古代の鏡』日本の美術393 至文堂

和田翠1978『古代日本における鏡と神仙思想』『古代日本文化の探求 鏡』社会思想社



第34図 多遺跡 第22次調査出土 鏡実測図



1. 第1トレンチ全景（北から）



2. 第2トレンチ全景（南から）



3. SD-1102遺物出土状況（北から）



4. SD-2101遺物出土状況（北西から）



5. SK-2109完掘状況（西から）



6. 第3トレンチ全景（北から）



7. SD-1102出土土器



8. SD-2101出土土器

9. 多新堂遺跡 第3・4次調査

1. 遺跡・既調査の概要

多新堂遺跡は、町南部の多集落の南側に拡がる遺跡である。寺川と飛鳥川に挟まれた標高53m前後の沖積地に立地し、遺跡中央を古代道路跡の筋道（太子道）が縱断する。

昭和59年、道路と水路の建設に伴って橿原考古学研究所が第1次調査をおこなった（多遺跡第9次調査として報告）。東西約310mにわたる調査では、弥生時代～古墳時代、古代、中世後期の複数時期の遺構を検出し、このうち中世の遺構は、周辺の小字「垣内」や「大上院」から寺院関連の遺構と考えられた。その後、町教育委員会では「大上院」西側の南北道路内で第2次調査を実施し、調査地南端で中世の河跡（S D-51）を検出した。中世河跡は筋道の推定線上に位置しており、道の側溝になる可能性も指摘されている。

本調査は農業用の用排水路の建設に伴う調査で、第1次調査地の南側（第3次）と北側（第4次）の2ヶ所で実施した。第3次調査の工事は東西約325mで、うち工区の東半部分が遺跡に該当する。工事掘削幅にあわせ、東西約127m×幅1.5mの調査区を設定し、調査を実施した。第4次調査は、工区東半の東西約112mを調査区として設定した。西半については試掘での対応とした。

2. 第3次調査の成果

（1）層序

第I層：暗茶褐色土、第II層：暗青灰色粘質土、第III層：黄灰色砂質土、第IV層：黄褐色土、第V層：黒褐色土、第VI層：灰色粘土、第VII層：暗灰色粘土（シルトブロック）。

調査地は道路と水田にまたがる。第I～III層は水田耕土及び床土層である。第IV層からは地山層で、その上面が全時期の遺構検出面である。このことから調査区周辺は中世以来、耕作等の削平を大きく受けたことが推察される。

（2）遺構と遺物

弥生時代以前の遺構

S R-101 調査区西半で検出した遺構である。東南東～西北西方向に軸をもち、やや蛇行する。幅は約5mを測る。底面を確認しておらず深さは0.8m以上である。土層は上層が青灰色砂質土や暗灰黄色粘質土等、中層が暗褐色粘土、下層は黒灰色粘土（シルトブロック）である。遺物が出土しておらず時期は不明。弥生時代以前の河跡堆積と考えられる。

古代～中世の遺構

S K-51 調査区中央で検出した土坑である。平面形は長方形で、長辺約1m、短辺約0.5m、深さは約0.5mを測る。灰青色細砂の单一堆積層で、一度に埋没したものと考えられる。遺物が出土しておらず時期は不明。本遺構上には後述のS X-51が堆積していることから、それよりも古い遺構と考えられる。井戸の可能性がある。

S D-51 調査区中央東で検出した溝である。南南東～北北西方向に軸をもつ。溝幅は約6.5m、深さは約0.6mで、堆積土は褐色粗砂や灰褐色粗砂、細砂やシルトである。瓦器の小片等が出土し

ており、鎌倉時代頃に埋没したと考えられる。

S D-52 調査区中央東、S D-51の西側に接して検出した浅い溝である。溝幅22～25m、深さは0.3mを測り、灰色細砂・シルトを堆積土とする。遺物は出土していない。

Pit-51・52 S D-52上で検出した柱穴である。南壁の断面観察によるとPit-51はS D-52を切っており、それより新しい。Pit-51の平面形は方形で長辺約0.4m、短辺約0.3m、深さは約0.25mを測る。底面中央は浅い円形の凹みがあり、柱抜き取り痕とみられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

S X-51 調査区中央、S D-52の西側約7mにわたって検出した、不定形な落ち込み状遺構である。深さは最深部で0.3mを測り、灰色細砂を堆積土とする。検出当初は畦畔と考えられたが、不規則な凹みの連続であり、遺構の性格は分からず。ただし、本遺構の西肩部はS D-52に平行しており、また堆積土も似ていることから、何らかの関連が想定される。土師器と須恵器小片が出土したのみで時期は不明。

S R-51 調査区東半約27mにわたって検出した、溝状遺構もしくは河跡である。位置関係から本地東側の第2次調査S D-51に対応する可能性が高く、これらを一連の遺構とすると幅は約30mを測る。ただし断面観察によると本遺構の下層は複数の溝状遺構が切り合っていることから、時期によって位置をややずらして走行していたことが推測される。最下層から完形の農具柄が出土した他、瓦器塊片を中心に中世の遺物が出土しており、この頃埋没したものと考えられる。本遺構の上面では近世素掘小溝が検出されないことから、近世においても落ち込み状の地形となっていた可能性がある。

近世以降

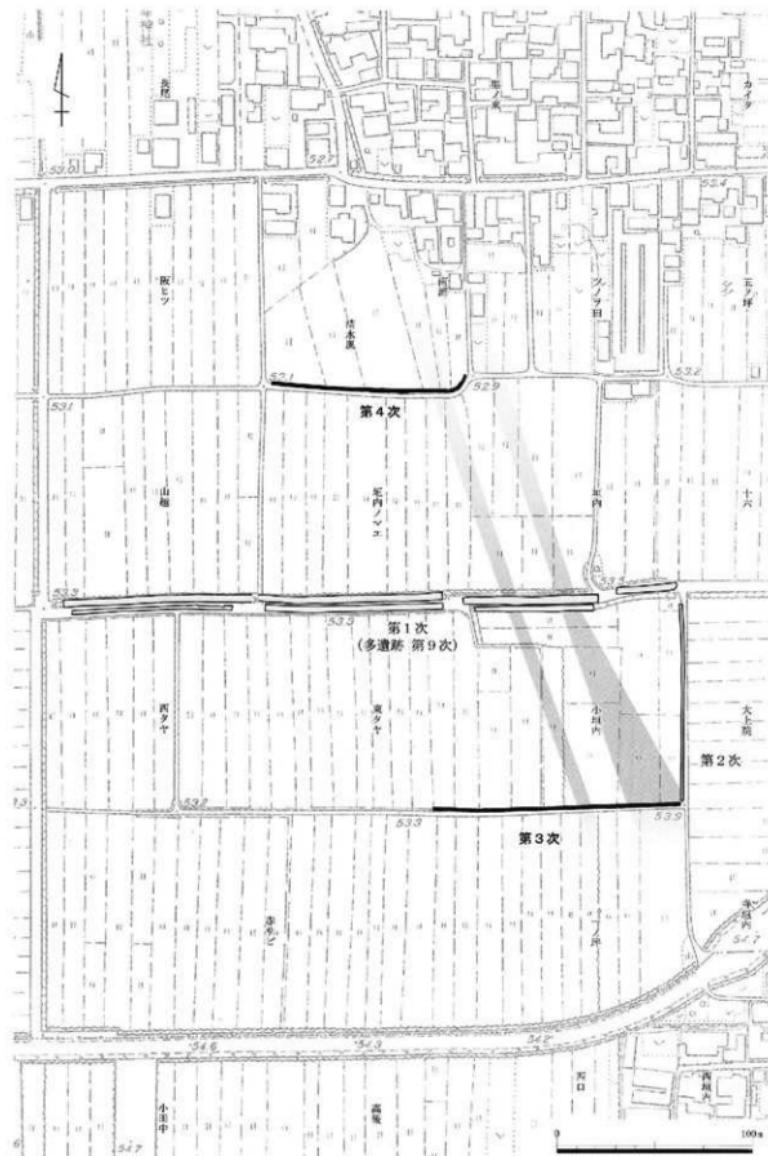
素掘小溝群 調査区全域で検出した小溝群である。幅0.2m、深さ0.1mで、灰色粘質土を堆積土とする。近世の耕作に伴う小溝であろう。

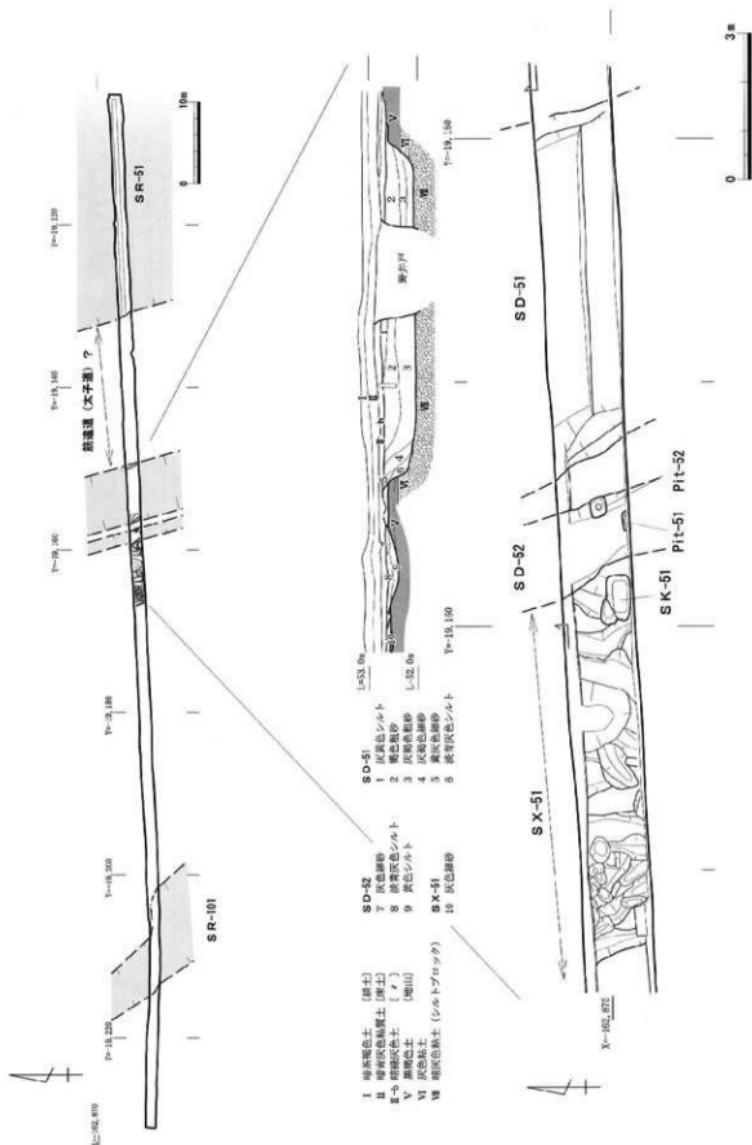
(3) 第3次調査小結

本調査では弥生時代以前、古代～中世、近世以降の3時期の遺構を検出した。また、遺物包含層等から少ないながらも前期弥生上器片や、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器、中近世など複数時期の遺物が出土している。

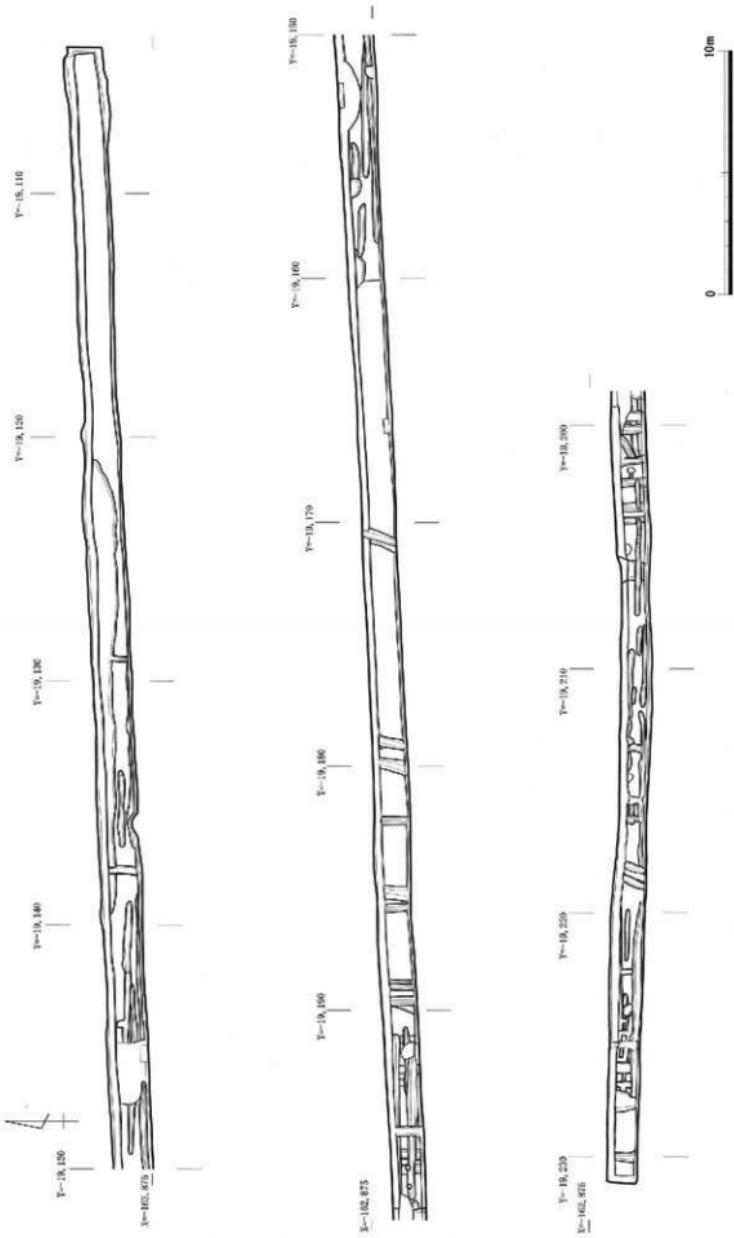
古代～中世の遺構について、出土遺物が極めて少なかったため時期を確定することはできなかつたが、切り合い関係からS D-52・S X-51・Pit-51・52・S D-51の新旧が考えられる。S D-51の出土遺物に瓦器塊小片や土師皿片が含まれていることから、S D-52とS X-51はそれ以前の遺構群である。S D-52はS D-51と直接切り合わないが、位置関係や走行方向から、S D-51の前身溝と考えられる。S D-52が埋没した後、より規模を大きくしたS D-51を隣接して削削したのであろう。

これらS D-51・S D-52と調査区東端で検出したS R-51は、走行方向や出土遺物、また位置関係から、筋道（太子道）の道路側溝となる可能性が考えられる。西側溝をS D-51とした場合、道路幅（溝を含めない）は約17.5m、西側溝をS D-52とした場合は約24mを測る。ただし、S R-51は前述のように時期によって位置をずらして走行していた可能性が高く、道路幅を確定することはできない。なお、S R-51は幅も広く、溝というより河跡の状況を呈している。ある程度人為的な規制を受けた、運河的な要素があった可能性が考えられる。

第35図 調査地位置図 ($S = 1/2,500$)



第36図 第3次調査 中世以前の遺構（左：S = 1/600、中・右：S = 1/100）



第37図 第3次調査 近世の塗構 (S = 1/200)

3. 第4次調査の成果

(1) 層序

第Ⅰ層：暗青褐色土、第Ⅱ層：青灰色粘質土、第Ⅲ層：茶灰色土、第Ⅳ層：暗茶灰色粘質土、第Ⅴ層：灰色粘土、第Ⅵ層：黒褐色土系。

調査地は道路と水田にまたがる。第Ⅰ～Ⅳ層は水田耕土及び底土層である。第Ⅴ層は中世の遺物包含層でその上面が近世遺構検出面、第Ⅵ層から下層は地山層でその上面が中世以前の遺構検出面である。

地形は西に向かってやや落ち込んでいたとみられ、調査区東端では第Ⅵ層上面の標高は約53.1mである。第Ⅵ層直下は、第Ⅶ層：黄褐色土、第Ⅷ層：灰色粘土（やや青）と続く。

(2) 遺構と遺物

中世以前の遺構

S K-51 調査区中央西で検出した土坑である。平面形は方形で、一边約1.2mを測る。深さは約1.2mで、上層が淡黄褐色粘土（灰色粘土・黑色土・ブロック混）や灰青色粘土、中層は暗青灰色粘土系、下層は淡青灰色粘土を埋土とする。本土坑はその規模や形態から井戸と考えられる。埋土から土師皿や瓦器皿の小片が少量出土しており、平安末～鎌倉時代とみられる。

S D-51 調査区東半で検出した溝である。南南東～北北西方向に軸をもつ。後世の遺構である S K-01・02により大きく削平を受けており、また西肩部は S R-51に切られているため、規模については不明な点が多い。層序から溝幅は約8.5m、深さは約1mを測ると推測される。遺物は出土していない。

S D-52 調査区中央西、S K-51の東側で検出した溝である。南東～北西方向に軸をもつ。溝幅約1.6m、深さは0.4mを測り、暗灰色粘質土及び暗灰色粘土を堆積土とする。土師質の土器細片が数点出土したのみで、時期は不明である。

S R-51 S D-51の西肩部を切って走行する河跡である。南西～北東方向に軸をもつものとみられる。幅は1.4m、深さは0.7m。上層は黒褐色土、中層は明褐色砂質土、下層は暗褐色砂である。遺物は出土しておらず時期不明。

近世以降の遺構

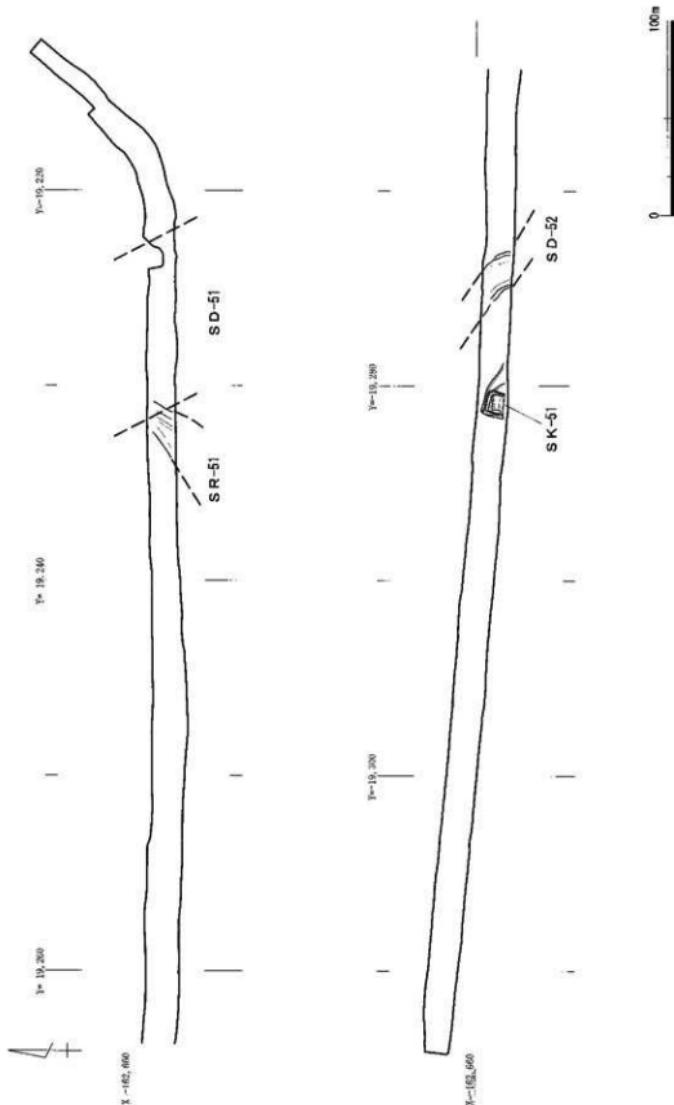
素掘小溝群 調査区全域で検出した小溝群である。幅0.2～0.4m、深さ0.1m前後で、青灰色粘土や暗青灰色粘質土を堆積土とする。近世の耕作に伴う小溝であろう。

S K-01・02・03 調査区東半で検出した野戸である。それぞれ木製の方形木枠をもつ。S K-01・02は切り合っており S K-02の方が古いが、近世後期より遅らないと考えられる。S K-01の直上にはコンクリート製の筒が設置しており、現在も農業用の井戸として使用されている。S K-03は付近住民もその存在を知っており、戦中から戦後すぐ頃に埋め立てたと伝わっていた。

(4) 第4次調査小結

調査では中世以前の遺構群と近世以降の遺構を検出した。時期を確定できない遺構が多いが、位置関係から S D-51は筋造道の西側溝に対応する可能性が考えられる。

なお、出土遺物では土師皿や土師質羽釜、瓦質土器等の室町期の遺物の比率が高い。調査地南側100mの第1次調査は、当該時期の集落（寺院か？）遺構を検出しており、今回の調査で出土した



第38図 第4次調査 中世以前の遺構図 (S = 1/250)

室町期の遺物はこれらに関連するものであろう。

4.まとめ

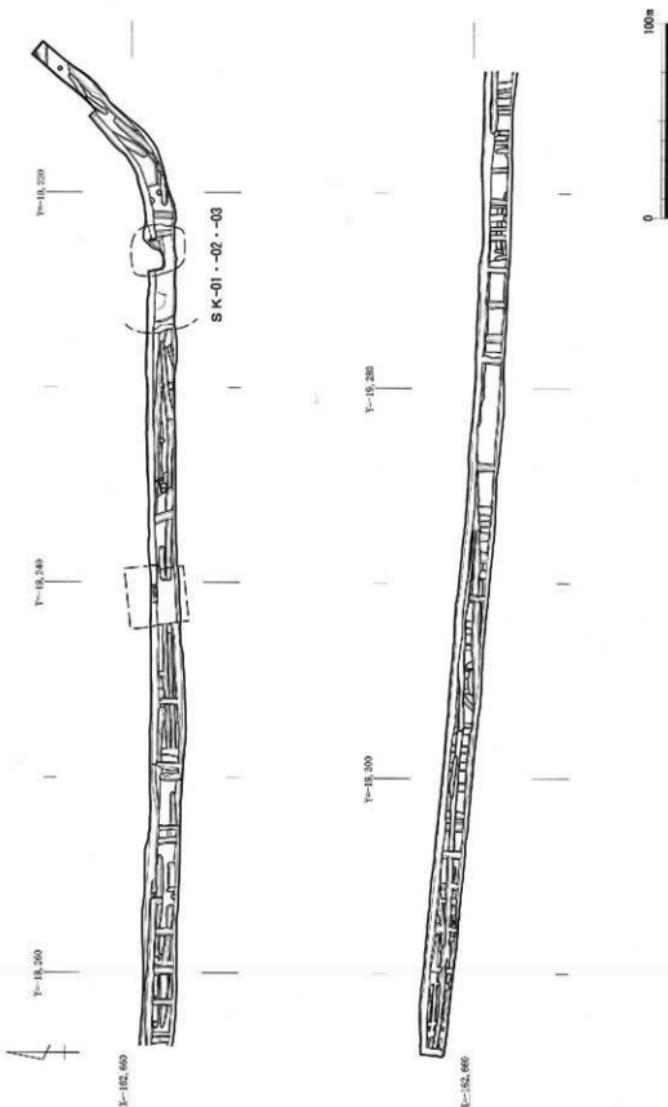
第3・4次調査における大きな成果は、古代道路・筋道の道路側溝を検出したことである。道幅は確定するには至らないものの、少なくとも17.5m以上を測ることが判明した。

西側側溝 筋道内側側溝は、位置関係や遺構規模（溝幅7m前後）から、第4次S D-51・第1次溝47（室町期の集落遺構として報告）・第3次S D-51が対応すると考えられる。しかし、それぞれの堆積土が異なることが問題として挙げられる。また西側溝の前身溝と考えられる第3次S D-52には、既往の調査で対応する遺構がない。時期も含めて一考を要する。

東側側溝 東側側溝の遺構対応関係については問題が多い。位置からは第1次河1と第2次S D-51・第3次S R-51がそれにあたる可能性があるが、遺構規模や堆積土、時期も異なっており、即断しがたい。推定ラインの北側は多集落内となり、その痕跡を見いだすことはできない。

時期 道の敷設時期を確認することはできなかった。ただし、第3次調査の西側溝S D-51は近世素掘小溝に切られており、また鎌倉期の遺物が出土している点から、中世段階まで道として機能していたことは確実である。道の廃絶は近世のことであろう。

筋道に沿って形成された多集落の成立時期や第1次調査における室町期の集落（寺院？）の完態といった問題にも関連しており、今後の課題である。



第39図 第4次調査 近世の遺構 (S = 1/250)



1. 第3次調査区全景（東から）



2. 第4次調査区全景（東から）



3. 第3次S D-52完掘状況（南西から）



4. 第4次S K-51完掘状況（南西から）



5. 第3次S R-51土層堆積状況（南東から）



6. 第4次S D-51・-52土層堆積状況（南西から）

10. 筋違道 第2次調査

1. 遺跡・既調査の概要

筋違道は飛鳥と斑鳩を直線的に結ぶ古代道路で、聖德太子が使用したといわれていることから「太子道」とも呼ばれる。田原本町の西部では、北北西-南南東に斜行するラインが想定されている。現在も生活道路として川西町から三宅町を経て、田原本町黒田から宮古までたどることができる。また、薬王寺東池西側でもその痕跡が認められる。

第1次調査は町北西部の黒田集落内で実施し、筋違道と平行する溝状遺構を検出した。調査では溝幅を明らかにできなかったが、遺構の最終埋没層では平安時代末頃の土器片が出土している。この他、保津・宮古遺跡第14次調査や薬王寺東遺跡第1次調査等でも道路側溝とみられる遺構を検出している。保津・宮古遺跡第14次調査で検出した道路側溝は溝幅3mを測り、6世紀中頃～7世紀後半の遺物が出土している。

今回の調査地は、多集落の北西端にある。多集落西辺の道路と水路が正方位から斜行しており、筋違道の痕跡を残しているものと考えられている。

なお、調査地西側には弥生～古墳時代の集落跡である多遺跡が抜がる。当地まで弥生時代の遺構が抜がるかどうかかも調査の焦点であった。

今回の調査は、個人住宅の建築に伴う事前調査で、建築予定地内において東西2m×南北15mの調査区を3ヶ所設定した。東側の調査区を第1トレンチ、中央を第2トレンチ、西側を第3トレンチとした。

2. 調査の成果

(1) 層序

第Ⅰ層：暗灰色土（ガラ・砾・砂混）、第Ⅱ層：灰褐色土、第Ⅲ層：暗茶灰色土（砂混）、第Ⅳ層：暗黄褐色土（シルト混・粘質）、第Ⅴ層：暗褐色砂質土（灰色土・シルト・炭混）。

第Ⅰ層は現代の家屋解体に伴う搅乱土である。第Ⅱ層は近代～現代、第Ⅲ層は近世前半の造成土と考えられ、第Ⅲ層上面が近世後半の遺構検出面である。第Ⅳ層は中世の造成土、第Ⅴ層上面が中世の遺構検出面である。

第Ⅵ層以下は古墳時代以前の落ち込みもしくは河跡堆積層と考えられる。最上層にあたる第Ⅴ層には布留式新段階の土器細片が含まれていたが、それより下層では遺物が出土しない。第2トレンチでは一部深掘りをおこない、地山とみられる黄褐色砂質土（上面標高51.6m）を確認した。よって古墳時代の落ち込み（もしくは河跡）の深さは0.7mである。

(2) 遺構と遺物

第1トレンチの遺構（近世）

SD-1001 トレンチの東側で検出した南北方向の溝である。溝の東肩は調査区外にあたることから、溝幅は1.8m前後とみられる。深さは約0.6m、上層は暗灰色土（炭・砂混）、中層は暗褐灰色

上、下層は暗灰黄色砂質土、最下層は灰色シルトである。

柱穴 柱穴2基を確認した。平面径0.2～0.4m、深さは約0.4m。暗灰色土を堆積土とする。

第2トレンチの遺構（中世）

素掘小溝 トレンチ東寄りで検出した小溝である。真北よりやや西にふれた方向軸をもつ。溝幅約0.3m、深さは0.2mを測り、灰褐色粘質土（褐斑）を堆積土とする。中世の耕作に伴う小溝と考えられる。

第3トレンチの遺構（中世）

素掘小溝群 計3条の素掘小溝を検出した。第2トレンチの素掘小溝と同じく、正方位よりややずれた軸をもつ。溝幅0.2～0.3m、深さ0.2mを測り、灰褐色粘質土を堆積土とする。

柱穴 柱穴1基を検出した。平面径は0.4m、深さは0.15mを測る。

3.まとめ

今回の調査では、弥生・古墳時代の遺物包含層は確認されず、遺物も微量であった。本地は多遺跡の周辺部にあたると考えられる。

また、筋道に伴う遺構・遺物も確認されなかった。道路側溝が今回の調査区からはずれた位置にあるのか、それとも本地周辺では側溝をともなっていないのか、全くの不明である。ただし、第2・3トレンチで検出した中世素掘小溝がやや斜行しているのは、筋道による規制をうけているものと考えられ、周辺に道が存在していた可能性は高い。

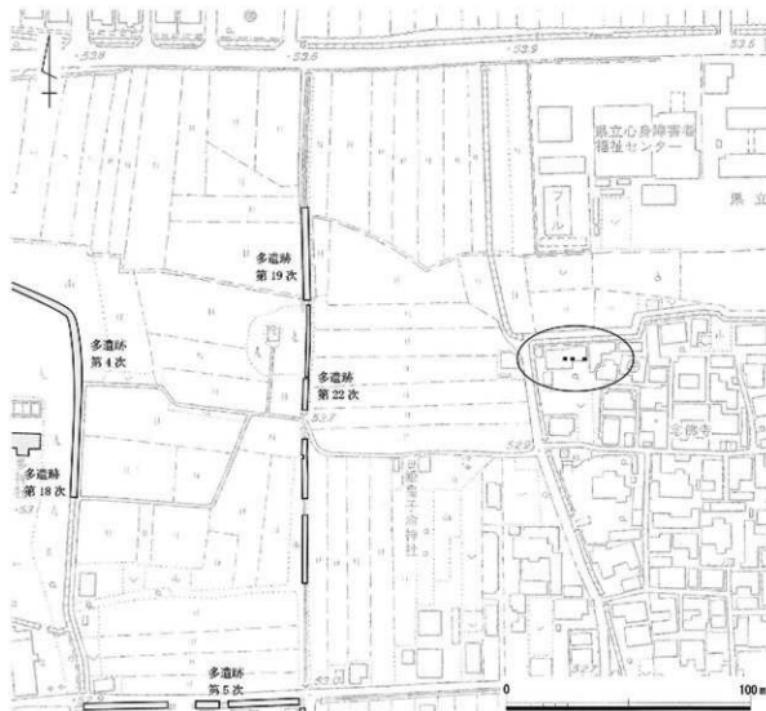
中世素掘小溝の時期を明確に確定できないが、包含層中の遺物から鎌倉期とみられる。本地が耕作地から宅地化するのは、近世初頭のことであろう。



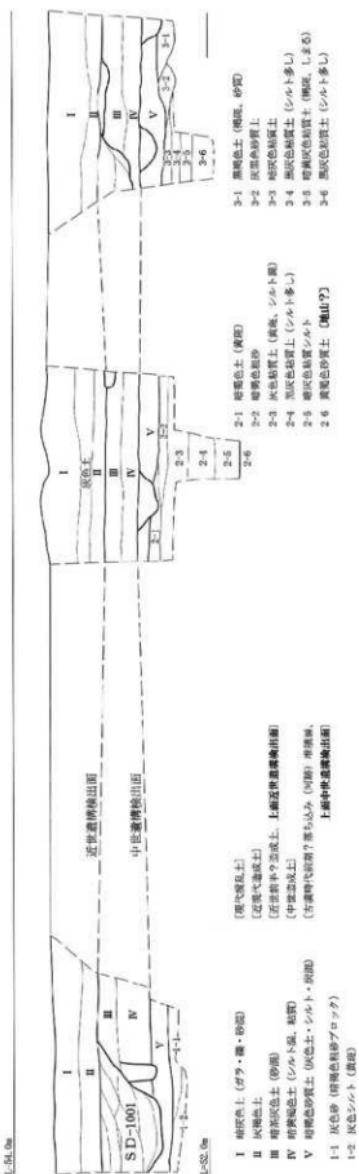
1. 第1トレンチ全景（北から）



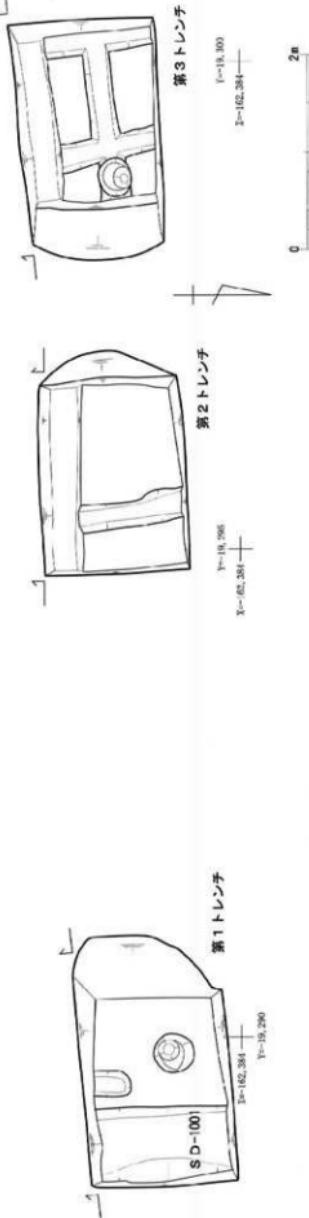
2. 第3トレンチ南壁土層堆積状況（北から）

1. 調査位置図 ($S = 1/2,500$)2. 調査区位置図 ($S = 1/400$)

第40図 筋道第2次調査地及び調査区位置図



第41図 調査区平面図及び南壁土層堆積図 ($S = 1/50$)



11. 平田遺跡 第1次発掘調査

1. 遺跡の概要

平田遺跡は、奈良盆地の中央、標高54m前後の沖積地に立地する。遺跡の北東には初瀬川が隣接して西北西方向に流れる。遺跡中央にて平成5年度にゴルフ練習場の建設工事に伴う試掘調査を実施し、北東部で奈良・室町時代の遺物包含層を確認している。ただし、事業範囲の大半が中世以降の初瀬川の氾濫原であることを確認している。また、遺跡南部で実施された平成21年度の下水道工事に伴って工事立会を実施しているが、ここでも遺跡中央部分を中心に河川堆積が拡がることを確認している。

今回の調査は、遺跡南端、ゴルフ場南側隣接地で携帯電話無線基地局の建設がおこなわれるのに伴って実施した。ただし、遺跡南端であり、周囲の調査成果から中世以降の初瀬川氾濫原内となる可能性が高いことから、電波塔設置部分の北半で 6.5×3 mの調査区を設け、初瀬川旧河道の堆積状況や時期の解明に努めた。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は荒蕪地であったが、ゴルフ練習場建設に伴って盛土工事がなされた。

第Ⅰ層：黄褐色砂礫土、第Ⅱ層：暗青褐色土、第Ⅲ層：青褐色シルト、第Ⅳ層：淡青灰色粘質シルト、第Ⅴ層：淡灰褐色土、第Ⅵ層：茶灰色粘質土、第Ⅶ層：茶灰色粘質土、第Ⅷ層：暗灰青色粘土、第Ⅸ層：黄灰色粘質シルト、第Ⅹ層：灰色粘土、第Ⅺ層：黒灰色粘土、第Ⅻ層：黒色粘土。

第Ⅵ層上面が近世～近代の遺構面となる。第Ⅵ～Ⅷ層は中世の河川堆積で、鎌倉時代～室町時代の遺物を含む。第Ⅸ層上面が鎌倉時代頃の流路3条を検出できる面となる（第2遺構面）。また、地山の第Ⅹ層上面を遺構面（第3遺構面）として時期不明の流路1条を検出している。

(2) 検出した遺構

第3遺構面の遺構

S R-101 調査区北端の深掘り部分で確認した、幅0.6m、深さ0.5mの河跡である。南東～北西方向に流れる。堆積上は灰色粗砂で、遺物は出土していない。初瀬川氾濫原に形成された古い流路の1つであろう。時期は明らかでない。古墳時代～古代頃の遺構であろうか。

第2遺構面の遺構

S R-01 調査区全体に拡がる河跡である。上層からは鎌倉時代～室町時代頃の土師器・瓦器・中世陶磁器が出土している。下層まで含めた深さは0.7mを測る。また、下層部分は2ヶ所の流路に分かれる。調査区西半で検出したSR-01Bは南北方向を基本とする流路で、幅2.2mを測る。最深部はさらに2条に分かれ、東半は南北方向、西半は北西方向に流れる。調査区東端で検出したSR-01Cは南東～北西方向の流路である。深さ0.4mを測る。幅は調査区外に拡がるため明らかでない。SR-01B、01Cともに鎌倉時代頃の遺物が少量出土した。

第1遺構面の遺構

素掘小溝群 調査区全体で南北方向を基本とする小溝群6条を検出した。いずれも幅0.2~0.3m、深さ0.1m前後である。近世の遺構とみられる。

3.まとめ

今回の調査では、初瀬川旧氾濫原の形成過程に関するデータを得ることができた。本調査で検出した初瀬川旧河道が鎌倉時代から室町時代にかけて埋没していったことが判明した。また、中世以前に遡る流路を検出したが、幅0.6mで比較的明確な立ち上がりをもつ溝状のものであり、阪手遺跡・柿ノ森遺跡等で検出している耕作に関わる可能性のある溝状遺構となる可能性も否定できない。ただし、今回の調査では時期と性格を決定するだけの根拠を欠くため、初瀬川氾濫原に形成された一主流として位置づけておきたい。

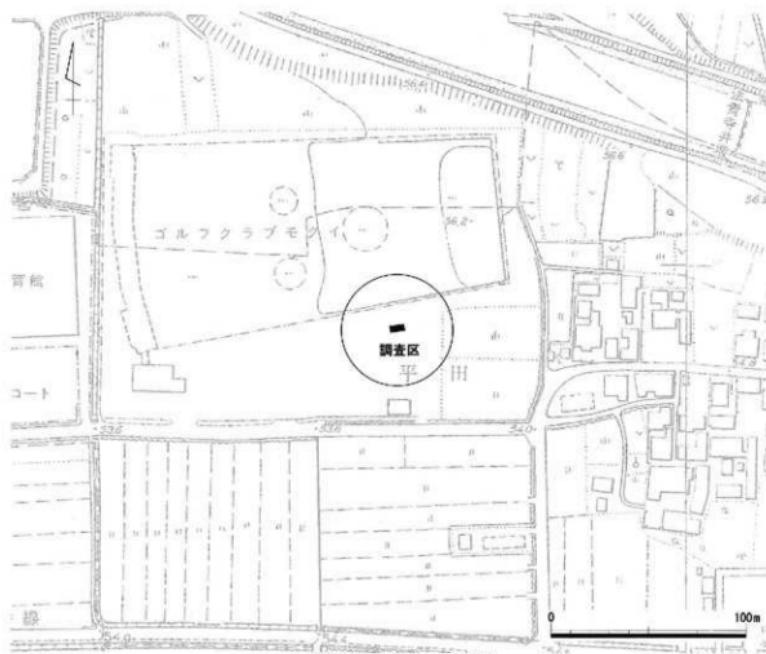
今回の調査では、中世の遺物が比較的多く出土している。今回の調査地が字「垣ノ内」の東端に位置することから、中世集落に近接する可能性も考慮する必要がある。ただし、周囲の試掘調査・工事立会のデータでは初瀬川氾濫原が拡がると考えられることから、今後の周辺での調査により確認していく必要がある。



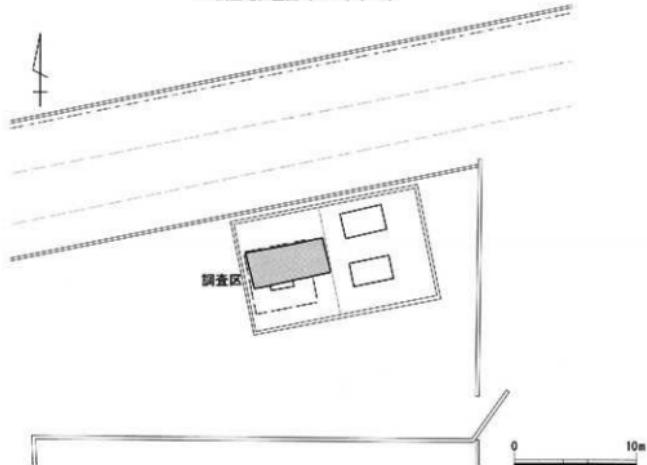
1. 調査区全景（東から）



2. 近世遺構完掘状況（東から）

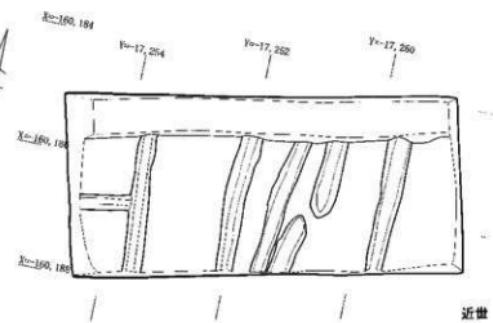
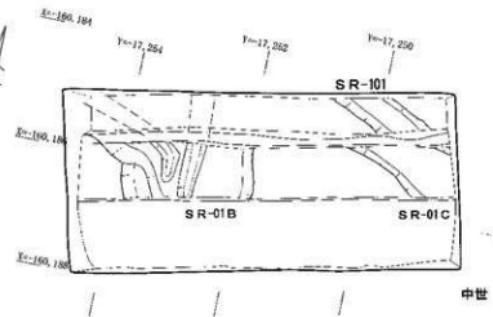
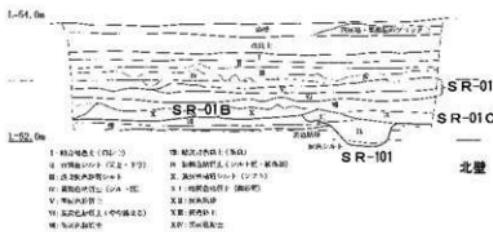


1. 調査位置図 ($S = 1/2,500$)



2. 調査区位置図 ($S = 1/400$)

第42図 平田遺跡 第1次調査地及び調査区位置図



0 4m

第43図 遺構平面図及び北壁土層堆積図 (S = 1/80)

12. 寺内町遺跡 第12次発掘調査

1. 遺跡の概要

寺内町遺跡は、奈良盆地の中央、標高50m前後の沖積地に立地する。近世初頭に教行寺を中核として造営された寺内町跡である。また、遺跡東南部に位置する楽田寺は、中世には「田原本寺」とも呼ばれ、大乗院寺社雜事記によると「平坊二十ヶ所計」の大寺院であったという。繪物座等の工人集団を抱え、下ツ道沿いという立地から商業の拠点となり、門前町として賑わったようである。

寺内町遺跡の発掘調査は、津島神社境内での第1次調査以来11次を数えている。また、北東に隣接する平野氏陣屋跡での調査も13次を数える。大半は小規模な個人住宅建築に伴う調査であるが、これらの積み重ねにより近世の陣屋及び寺内町、中世の豪族屋敷跡及び門前町の状況が徐々に明らかになってきている。

今回の調査は、個人住宅の建築に伴うものである。寺内町の東部、田原橋から淨照寺楼門へと続く東西道路に面した地点での調査で、中世～近世の遺構が抜がる可能性が考えられた。

2. 調査の成果

(1) 層序

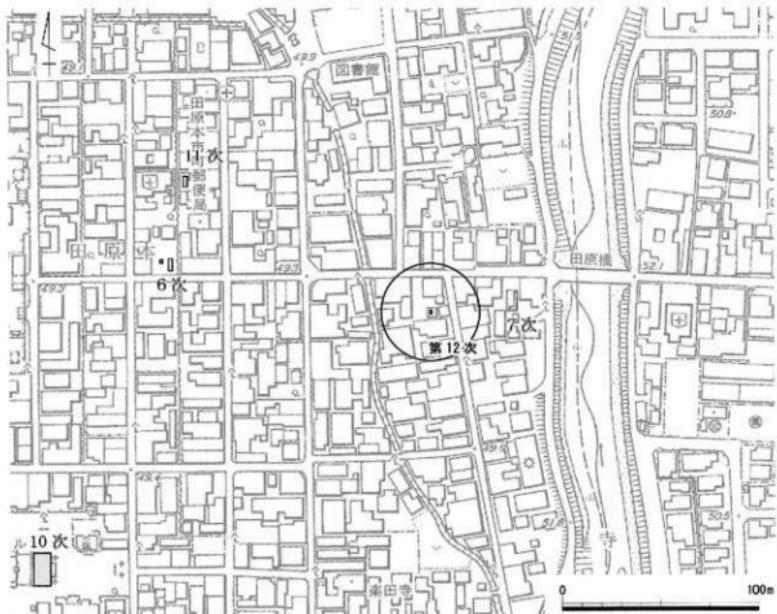
調査地の現況は宅地である。近年まで民家が建っていたが、解体後分譲化されたものである。第Ⅰ層：暗褐色土・茶灰色土・褐色粗砂、第Ⅱ層：黄褐色粘質土、第Ⅲ層：灰色粗砂。調査区全体は過去の工事による擾乱を大きく受けている。調査区西側2/3が南北方向のコンクリート擁壁による擾乱で、調査区東端1/3において遺構面を確認したにすぎない。しかも、調査区東端中央ではコンクリート製の枠とみられる構造物があり、遺構が遺存していた範囲は調査地全体の2割程度である。このような状況ではあるが、地山の第Ⅱ層上面で中世の土坑を検出した。

(2) 遺構と遺物

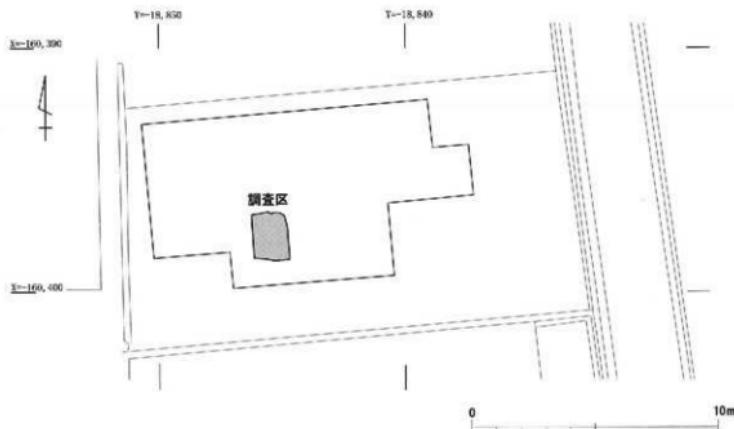
S K-01 調査区南端で検出した土坑である。調査区外に抜がるため規模は明らかでない。深さ0.5m。室町時代頃の遺物が出土した。湧水が激しいものの、遺構の性格は明らかでない。

3.まとめ

調査の結果、全体に激しい擾乱が抜がっていることを確認した。南北方向の擁壁は、調査区付近で地番が分かれていたことと関係があろう。このような状況ではあったが、室町時代頃の土坑を1基確認した。周辺での発掘調査でも楽田寺門前町に関わるとみられる中世後期の遺構が確認されていることから、本調査地にもこれらと一連の遺構が抜がるとみられる。

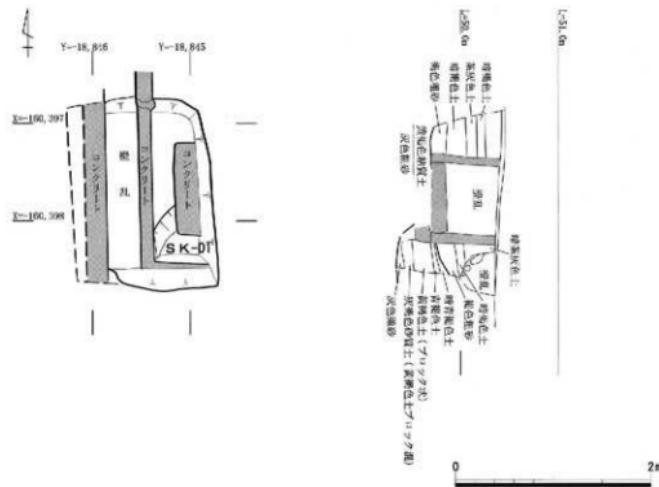


1. 調査地位置図 ($S = 1/2,500$)

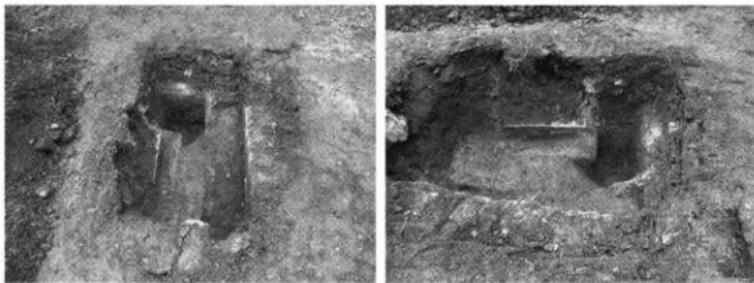


2. 調査区位置図 ($S = 1/200$)

第44図 寺内町遺跡 第12次調査地及び調査区位置図



第45図 道構平面図及東壁土層堆積図 (S = 1/50)



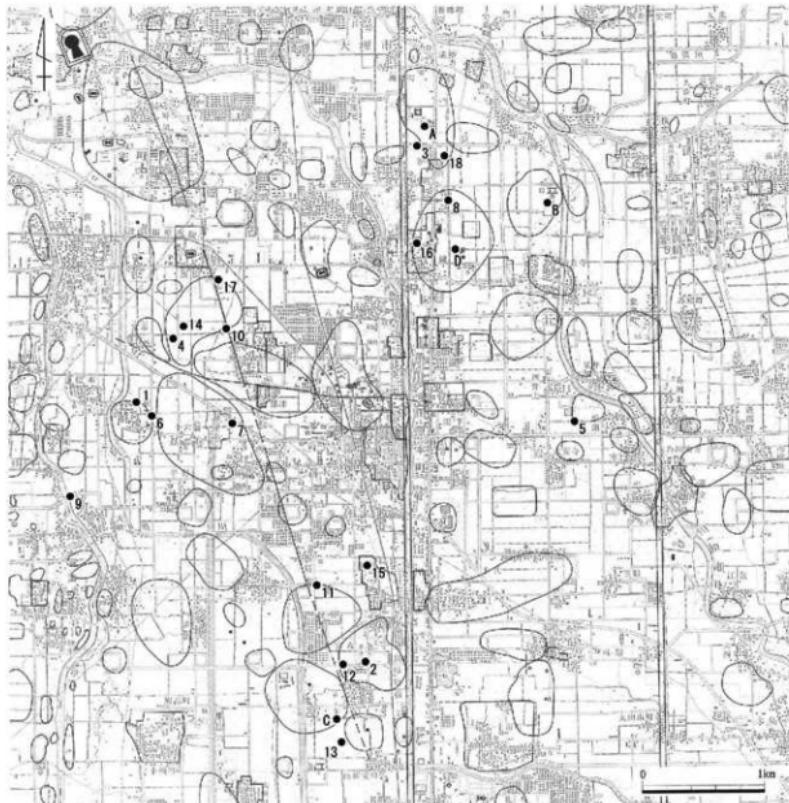
1. 調査区全景 (北から)

2. 東壁土層堆積状況 (西から)

(2) 試掘調査・工事立会の概要

2009年度に実施した試掘調査は4件（第8表）、工事立会は18件（第9表）である。唐古・鍵遺跡を除く試掘調査では顯著な遺構・遺物を検出しておらず、遺跡の縁辺部とみられる。唐古・鍵遺跡の試掘調査は史跡整備に伴う水路工事設計のためのもので、弥生時代の遺構検出面・包含層の状況を確認した。

工事立会においても目立った遺構・遺物は確認されていない。大半は工事掘削が浅いか、近世以降の擾乱を受けている事例である。



第46図 田原本町の遺跡と試掘調査・工事立会地点 (S = 1/40,000)

第8表 2009年度 試掘調査一覧表

竪番名	調査地	原因者	原因	期間	面積	担当	備考
							遺物量(箱)
A 清水風 (S-200901)	田原本町大字唐古小字黒原373番1 御谷	防火水槽の建設	2009.4.7 弥生時代:落ち込み	15m ² 清水・ 御谷	消防・ 東谷	国庫補助 4袋	4袋
B 法貴寺北 (S-200902)	田原本町大字法貴寺小字ハジカミ 1361番1 古墳時代~古代 河跡1条	沿岸良景サツ カーサ会	サッカーフィールドおよび付属施設の建設	2009.7.7 ~7.8	21m ² 農谷	国庫補助	1箱
C 多 (S-200903)	田原本町大字多小字阪ヒツ 285番地 南側道路 中近世:志賀小瀬郡	田原本町長	農業基盤整備事業 (用排水路工事)	2009.11.20 ~12.2	8m ² 清水	建設課	1箱
D 唐古・健 (S-200904)	田原本町大字唐古小字登呂呂町 222番1の一部はか (弥生時代遺傳後田面の確認)	田原本町長	史跡整備事業 (水路建設)	2010.12.22 ~12.25	9m ² 清水	総合政策課	1箱

1. 清水風遺跡 試掘調査 (S-200901)

1. 遺跡・既調査の概要

清水風遺跡は、奈良盆地の中央、標高47m前後の沖積地に立地する。1986年に二階堂養護学校の建築に先立って櫻原考古学研究所が発掘調査をおこない、弥生時代中期初頭の方形周溝墓や弥生時代中期後半の河跡などを検出した。特に、弥生時代中期後半の河跡から出土した多数の絵画土器は極めて重要な資料となっている。また、平成8年に田原本町教育委員会が実施した第2次調査でも一連の河跡から絵画土器が多数出土した。

今回の調査は、第2次調査地の南側約100mでの防火水槽建築に先立って実施した。調査地点は弥生時代中期河跡推定ライン付近にあり、もし河跡に該当する地点となれば多数の遺物が出土する可能性が考えられた。ただし、この地点は以前コンクリートプラントの設置されていた箇所であり、過去の開発による破壊を相当受けている可能性があった。このため、本調査に先立って試掘調査により遺構の残存状況及び遺構の分布状況を確認する必要があった。

2. 調査の成果

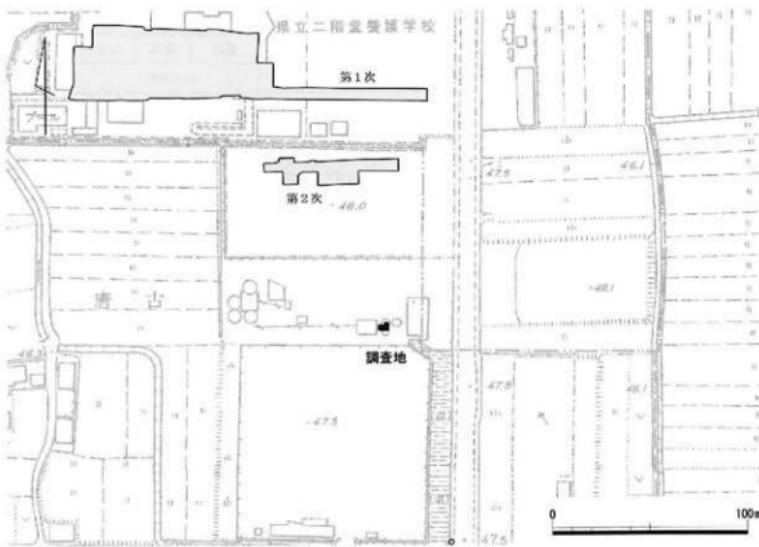
(1) 層序

第Ⅰ層：クラッシャー、第Ⅱ層：暗褐色土（瓦礫多数含む）、第Ⅲ層：青灰色粘土、第Ⅳ層：淡黃灰色粘土、第Ⅴ層：暗灰色粘土、第Ⅵ層：暗橙褐色土、第Ⅶ層：暗灰色粘土（シルト質）。

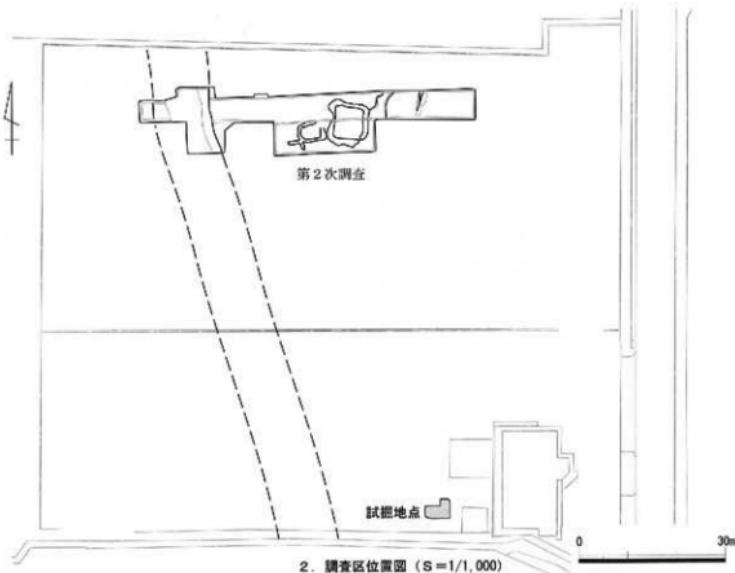
弥生時代の遺構面は第Ⅵ層上面であるが、全体が落ち込み状の遺構となる。また、調査区北東部が生コンクリートプラント解体工事により大きく擾乱を受けていた。第Ⅵ層が弥生時代遺物包含層、第Ⅶ層以下が地山層である。

(2) 遺構と遺物

落ち込みⅠ 調査区全体が薄い弥生時代中期前後の堆積層であった。厚さ0.2m。狭小な検出範

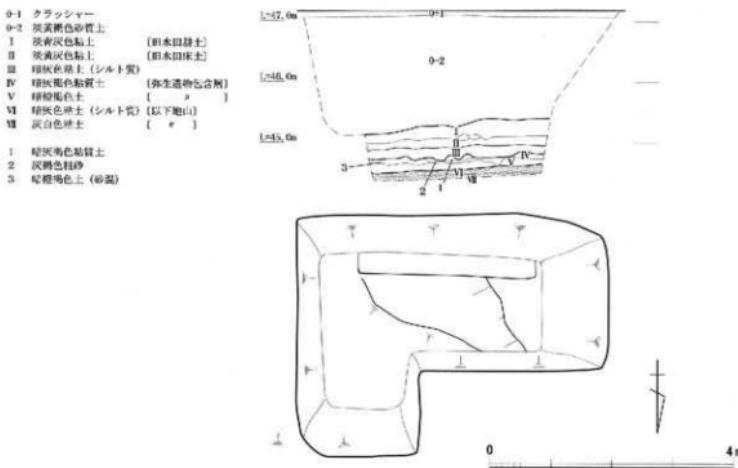


1. 調査位置図 ($S = 1/2,500$)



2. 調査区位置図 ($S = 1/1,000$)

第47図 清水風遺跡 試掘調査地及び位置図

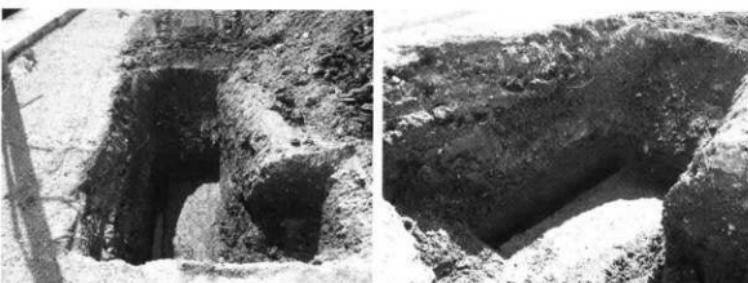


第48図 遺構平面図及び南壁上層堆積図(S=1/80)

間ではあるが、中層堆積の西肩は北西－南東方向とみられる。遺物は、弥生土器片がわずかに出土した。

3.まとめ

今回の調査では、期待された弥生時代中期後半の河跡を検出することができなかった。調査地全体が弥生時代中期頃の浅い落ち込みとなっており、河跡は本調査地よりもさらに西側に存在する可能性が考えられる。また、防火水槽設置予定範囲のうち、北東部は生コンクリートプラントの解体工事により破壊されていることを確認した。これらの状況から、試掘調査による確認のみで発掘調査を終了するのが適当と判断するに至った。



1. 調査区全景（東から）

2. 南壁土層堆積状況（北東から）

2. 法貴寺北遺跡 試掘調査（S-200902）

1. 遺跡・既調査の概要

法貴寺北遺跡は初瀬川の西岸、標高48m前後の沖積地に立地する。1982年に県立樋原考古学研究所が実施した志貴高等学校の建設に伴う調査では、弥生時代末～古墳時代初頭の方形周溝墓群を検出しており、唐古・跡遺跡の墓域と考えられている。

本調査地は、平成17年に統廃合された志貴高等学校のグラウンド内で、フットボールセンターとしてサッカーグラウンドや事務所等の建設が予定された場所である。調査は遺構検出面の把握を目的として、事務所建設予定地内において南北2ヶ所の調査区を設定した。

2. 調査の成果

（1）層序

第0層：クラッシャー・砂礫等、第I-a層：青灰色粘質土（シルト混）、第I-b層：緑灰色シルト、第II-a層：灰黄色土（シルト質）第II-b層：黄灰色粘質土（黄褐斑、シルト混）、第III層：暗褐色砂質土・灰褐色シルト、第IV層：灰色細砂、第V層：青灰色シルト。

本地表土面より約1.4mはグラウンド造成土及び造成に伴う擾乱層である。第I層及び第II層は旧水田耕上・床土層である。その直下、第III層上面（表土面より-2.1m、標高約47.3m前後）が中世遺構検出面となる。第III層以下は河跡S R-101の堆積層である。

（2）遺構と遺物

S R-101　両トレント全域で検出した河跡堆積層である。遺構規模は不明。出土遺物は少ないが、既往の調査から弥生時代～古代のものと考えられる。

素掘小溝　S R-101の上面で検出した東西方向の小溝である。溝幅約0.4m、深さ約0.2mを測り、灰色粘質土を堆積層とする。中世の耕作に伴う伴う小溝であろう。

3. まとめ

今回の調査では当初想定された河跡を検出した。本地西側の南北道路内でおこなった第6次調査では、北端のトレントで古墳時代初頭の遺構を確認しており、旧志貴高等学校の校舎付近に微高地が拡がることが想定されている。今回はこれまでの調査結果を追認する結果となった。